魔法少女リリカルなのはって何？

平民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはって何？

【Ｎコード】
Ｎ７３６７Ｚ

【作者名】
平民

【あらすじ】
この世から死んでいった主人公の前に現れたのは神と名乗るもので転生させてくれるという。　主人公は原作知識もないまま、生きていけるのか？
注意　現実にある団体や場所などとは関係がありません。
　さらにこれは作者の妄想の垂れ流しです。処女作ですので駄文です。

注意点（前書き）

何故書いたんだろうか・・・・

注意点

この作品を読むにあたっての注意点

○作者は厨二病でありそれが嫌な方は戻るなりブラウザを閉じてください

○この作品は魔法少女リリカルなのはとありますが作者は最近見たばかりなので更新はかなり遅いです

○原作が崩壊する可能性があります。それらが嫌な方も戻るなりブラウザを閉じてください

○ご都合主義、主人公最強が嫌な方も戻るなりブラウザを閉じてください

○作者はこれが始めてなので改善点などを教えてくれるとありがたいです（これは別にかまいません）

○文がおかしいところもありますので矛盾しているかもしれません。

○リリカルなのはと在りますがあまり関係ありません

以上の注意点を確認し、作者の妄想を受け入れられる方のみ進んでください

注意点（後書き）

反省も後悔もしている。

プロローグ（前書き）

駄文で拙い文ですがどうぞ

プロローグ

なぜ、ここにいるんだろう。なぜ、目の前に頭が光輝いて髪が異常なほど長いおっさんがいるんだろう
おかしい、何かがおかしい俺は確か死んだはずなのに生きていると思える。
とりあえずなぜ死んだのか思い出してみよう・・・・・

病院で入院。原因不明の病気だったかな?

「はぁ、暇だ」

そう呟く、入院なんて退屈なだけだろうにご飯はあまりおいしくないし、あぁ鬱になる。そう思いつつパソコンをつける何故かパソコンは使ってもいいらしい病院なのに・・・・とりあえずお気に入りのファンフィクション小説を見る

「いいなぁ。色々なチートや転生ボーナスもらえて。」

そういい、更新されている物の続きを見る。こういうのを見ているとこう、胸が熱くなるというよりもなぜ、ここまで平和な日々を送ってきたのに簡単に能力を把握して簡単に戦えるのか思う。まぁ、現実じゃないからあまり気にしないほうがいいと思う。

このような毎日をもう何年、何十年と繰り返している。元気なときと比べるとただベットにいるか、いないかぐらいしか変わらないと思う。今頃元気だったら中学三年で受験勉強かな？そう思うと嫌になってくる。あぁ本気で鬱になりそうだ、いややる気が起きないの方が正しいのか？不意に外をみると夕焼けが病院の周りにある木と重なって綺麗に見えた。味気のない病院の夕食を食べつつパソコンの某動画サイトを見る。もちろんアニメだ。夕食を食べ終わり動画の続きを見る。

眠くなってきた。時計を見る、もう消灯時間だ。パソコンを消し、掛け布団をかぶりそして目をつぶる

電気が暗くなる、消灯時間が来たようだ俺はいつまでこのような毎日が単調で、平凡であり、平和な変わらない無限ループの中でいつまですごしていけばいいのだろうか？だんだんと眠くなってきた。このまま明日も変わらない毎日が来るのか・・・・そう思いため息をつく。あぁ幸せが逃げていく。もう考えるのはやめよう。俺は鬱になりかけのまま暗い意識の中に落ちていった

そう、俺がいつまでも続いていく平凡で、平和な、単調な作業をこなしていくだけの無限ループの日々が終わるとも知らずに・・・・・・・

プロローグ（後書き）

パソコンはもちろんノートパソコンであり病院の設定は自分の勝手な想像です

プロローグ　突然の終わり（前書き）

原作はまだ入りません。なぜならまだまとまっていないから。

プロローグ　突然の終わり

そう、突然だったのだ。急に目が覚めて気分が悪くなってくる。苦しい、苦しい息ができない。
落ち着け、落ち着くんだ。よくあるだろう冷静になれ。よくあるというのはたまに気分が悪くなるのだ
しかし、今までのとは比にならないくらい苦しくなった。俺は必死にナースコールを押そうとした。しかし・・・押せなかったいや腕が痺れて動かないのだ。それは、自分のものなのに自分ものじゃないように感じた。
やばい、やばい。これってよくいう詰んだといういう状況なのか？
なぜかそう思った。
でも…これだけは思う＜死にたくない＞そうだ、死にたくないのだ。
俺はまだ１４という若いまま死にたくないのだ両親の半分以下、弟の半分以上で・・・
だけど、俺はどこかであきらめていたのかもしれない生きるということを。そう思うと最後の足掻きだが俺は思い切り腕を上げようとしたが痛い、痛すぎる声をあげようとしても空気のヒューヒューという音しか鳴らない
あぁ、やっぱりだめかそう思い意識が闇に落ちていった

結果的には助かったのだ。俺は自分が生きている中で一番うれしか

ったことに違いない

親と医者の声が聞こえる

「とりあえず、まぁ大丈夫でしょう。」

いやいや、まぁってなんだよ。まぁって。

「「ありがとうございます。」」

そう、親の声が聞こえる

「後遺症もありませんし。このままいけば助かるでしょう。」

あぁ、助かるのか俺はそう思い、意識を闇の中に落としていった。

なぜ、ここにいるんだろう。俺は助かったはずじゃなかったのか？
すべてを思い出し終わり目の前にいるおっさんみたいなおじいさん
が俺の心を見透かしたように言う

「お前は死んだのだよ。」

そう俺に向かい言った。

プロローグ　突然の終わり（後書き）

よくある転生者ですね。テンプレかもしれませんけど・・・

１／６　少し修正

プロローグ　死んだ先の行方（前書き）

テンションがあがり、宿題も手につかない。しかし俺は今年には終わらせる！
たぶん…

プロローグ　死んだ先の行方

「お前は死んだのだよ。」

目の前にいるおっさん？に、こう言う

「ここはどこなんだ？俺はなぜここにいるのか？」

「一つ目の質問の答えは、ここはお前たちで言う死んだ先の世界。簡単に言うと天国や地獄だ。二つ目はお前が死んだからだ。一つ目で言った通り死んだ先の世界にいるのだから当たり前だろう？」

俺は理解できなかった。なぜ？助かったんじゃないか？そう思うと異常に苛立ってきた。

「そう怒るなよ。死んだものは仕方がないことで願えば帰れるのか？割り切れよ。お前はよく割り切ってきただろう？」

違う、俺は割り切っていない。諦めていたのだ。突然の原因不明の病気にかかり諦めていたのだ。
ここに来た時に死んだはずなのにと思ったのもどこかで諦めていたかもしれないからだ。
よく見る小説の設定のようなところにいたからである。たしか、転生者の物だった気がする

「なぁ、そう落ち込むなってこっちも仕方がないんだよ。お前が思っている転生物の書類が～とか、失敗して～とかじゃないからな。」

落ち込む？そんな顔をしているのか？苛立ちじゃなくて？

「あぁ、している。この世の中が信じられないって顔をしているよ。」

それはいきなり死んだといわれたらそうなるだろう。

「俺は・・・・・どうなるんだ。」

「このまま消えるか？というよりも、消すんだが。」

嫌だ、嫌だ、死にたくない。その前に親に迷惑を掛けたことを謝らないといけない。

「嫌だ。俺は消えたくない。俺は死にたくない！」

「そうか…よく言った！」

「はい？」

反射的に疑問が口に出ていた

「ここからは俺の管理じゃないからな。ちょっと待ってろ、親父を呼んでくる。」

え？親父？オヤジ？親父って父だよな？英語でｆａｔｈｅｒ　だっけ？とりあえず、目の前にいたおっさん？の父が出てくるのか？疑問や謎を残したままこの場で考えていたら

「何じゃよ。今アニメで感動の所なんじゃよ？最終回なんじゃよ？」

「うるせえよ。親父がポンポン書類を適当に押すから謹慎食らったんだろ？」

「うるせえとは何事じゃ！最終回で感動の場面じゃよ？そこでとめられた者の怒りを思い知れ！」

「あほか。今は神通力は使えないだろう？」

「ふっ。あまいわ！くｒ「おい。放心しているぞ。」

「あぁ、そうじゃな。」

そう聞こえたとき俺はどんな顔をしていたのだろうか？

プロローグ　死んだ先の行方（後書き）

トントン拍子で進めて行きたいです。

プロローグ　これからの準備（前書き）

Ｑ　こんなに飛ばして大丈夫なのか？

Ａ　無理だと思います。

プロローグ　これからの準備

とりあえず現状を確認だ。
俺知らないところにいる⇒なぜこうなったか思い出す⇒おっさん？登場⇒なんか消すとか⇒消えたくないという⇒親父を呼びに行く⇒アニメのことで怒るおじいさん登場だな。
とりあえず俺はどうなるのか不安になってきた。

「ふむ、でなんじゃこの子供は？」

「消そうと思ったら消えたくないんだとよ。」

「そうか、でなぜ消さない？」

「面白そうだから。」

あれ？俺って面白いのか？ただ理不尽な死を受け入れたくないから消えたくないと言った訳で

「で、お主は死にたくないのか？」

「ああ。」

「それがつらいことでもか？」

「どのようにつらいのか教えてもらいたいのだか？」

「なぜ敬語じゃないんじゃ？神様じゃよ？最高神じゃよ？「テンプレですね。」話の途中でしゃべるな！「すいません」これだから最

近の若い者は・・・」

なんかぶつぶつ言ってるけれど大丈夫なのか？

「親父、俺まだ仕事残ってるから後よろしく。」

そういい最初にいたおっさん？は消えた。やはり、ここは俺の知っているところじゃない

「さてと、お主を転生させるがどこがいい？」

「え？これって俺が決めるの？」

「まぁそうしたいのじゃが、わしは最高神じゃからとっておきの世界に転生させてやろう。」

「ありがとうございます？」

「なぜ疑問なんじゃ？まぁ、聞いて驚け！その名も＜魔法少女リリカルなのは＞　じゃ！。」

「魔法少女リリカルなのは？それって何？」

疑問に思ったのでそう返すと最高神が

「な、知らないというのか！あのすばらしいアニメを…」

なんか落ち込んでいるけどもう動じないありえないことなんてないのだから

「まぁ、その世界に行くためのボーナスのようなチートをやろう！」

「なんでもいいのか？」

「わしを誰だと思っている最高神じゃよ？最高の神じゃよ？そんなわしに不可能なんてない！」

なんか力説しているんだが疑問を述べる

「何個でもいいのか？」

「ああわしは最高信者からな。その前にたくさん書類失敗してたくさん願いを叶えてやったからな！」

「たくさんってどのくらい？」

「さあ？わしは数十人じゃったような？」

やばい、この最高神は書類を数十人分失敗して殺したということだよな？

「あぁ、ちゃんと土下座して能力をやるといったら狂ったように叫んで色々能力を・・・って聞いてる？」

「土下座ですむものなのか？」

「あぁ、許してくれるか聞いたらすごくいい笑顔で許してくれたんじゃよ。」

「どんな人が来たのかおしえてくれませんか？」

「さぁ？みんなその世界に絶望したり諦めていたからなぁ。よく覚えておらん。」

「で、その世界に行くためのボーナスはいくらでもいいと？」

「もちろん。で、何を望むんじゃ。」

「そう、だな。まず動物と会話できるように。あと足を早くしてくれ。生活に困らないようにお金をくれ。あとは・・・・ないかな」

「なんじゃ？その夢のないものは？もっとさ、強く！かぎりなく強く！とかニコポとナデポとかフラグを簡単に立てれるようにとかイケメンにとかないのか？」

「最高神さん、別にいいんです。最強になりたいわけじゃないし。」

「じゃが心の奥では願っていると思うんじゃが？」

「なら、それなら大切なものを守れる力をください。」

「わかった　それでいいんじゃな？」

「いや、まだです。向こうの世界にいっても願いをかなえさせてください」

これは保険だ。向こうで何が起こるかわからないし

「了解じゃ。」

プロローグ　これからの準備（後書き）

会話が長くなりました
作者も魔法少女リリカルなのははよく知りません
変なところで切ってしまいすみません

プロローグ　さらなる準備（前書き）

まだ続くプロローグという名の時間稼ぎ

プロローグ　さらなる準備

「了解じゃ。」

そう最高神が言うと目の前が光り輝いて…なんてことは起きなかった。少しがっかりだ

「なんじゃ？その不満そうな顔は？まあいいじゃろうその前にこれから転生するための世界は知っているか？」

「魔法少女リリカルなのはという世界だろう？だがしかし、俺はそんなアニメは知らないぞ？」

「そうか…ならばこのわしがお前にどれだけすばらしいのか教えてやろう！」

そういいかなりあつく語り始めた……唾が飛んでくる。はぁ欝だ

～３０分ぐらい経過～

「～であるからしてとても！すごく！熱い！アニメなんじゃ！」

～1時間ぐらい経過～

「さらに感動もできる！とてもよいアニメなんじゃ！」

～2時間ぐらい経過

「で！そんな！とてもすばらしい！わしの！大好きな！世界に！転生させてあげる訳なんじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

とても長い原作と関係ないこのアニメの世界がすばらしいか延々と聞かされた…まぁ、ほぼ聞き流したのだが…

「でさ結局どんな世界なんだ？」

「簡単に言うと魔法が使えるようになる！かも知れない世界じゃよ？」

「なぜ疑問なんだよ。」

「そこは努力しだいということで。」

その後、少し原作について教えてもらいました。ストレージ？やインテリジェント？ユニゾン？などのデバイスという物を使うことなどを知りましたがよく分からないので、デバイスって何だよ。みたいな感じです

「で、欲しくならないか？デバイスを？欲ｓ「別にいりませんよ。」なんじゃと！どれぐらいすごいのか分かったじゃろ？いまなら好きなデバイスで名前も付けられてバリアジャケットのデザインも考えられるんじゃよ？そんなお得な機会なんてないんじゃよ？」

「別に最強を目指している訳じゃないし別にいらないと思いますよ？」

「甘い、それは正論じゃがとても甘い考えじゃよ。これから行く世界は死亡フラグがあるんじゃよ？そんな危険から守るための一家に一台のデバイス！どうじゃ？欲しくなったじゃろう？」

なぜそんな通販みたいな言い方なのか分からないがいらないものはいらないそう思う

「まぁそこまで断るならいいじゃろう…（お前の病院生活で考えていた痛い妄想をつめこんでやるわ！そして勝手に送ってやる！）」

なぜか寒気がした。こう背中に虫が這いずり回るような生命の危機に似た何かを感じた

「まぁそこまで断るのは初めてじゃしな。他の転生者はやはり狂喜乱舞しておったのに…」

それは、原作を知りどうすればいいか知っているからでは？いやその前に“他の転生者”と言ったか？

「なぁ最高神さん他の転生者って何人いるんだ？」

「まぁざっと、わしの書類ミスで数十人…約４０人くらいで他の所からくるのをあわせると数百人は超えるんじゃないかのう？」

その言葉を聞いたとき戦慄した。まずこの神の他に神がたくさんいて、しかもそれらの神が書類ミスなどでも無意味に死んでいるのか？その前にポンポンと書類ミスなどで死んでも大丈夫なのか？

「何を考えているか大体分かるんじゃが書類ミスなんて夜にやらせるからミスをするんじゃ！もっと自由時間を！週休五日！これぐらいくれてもいいと思うんじゃよ。」

「いや、あなた最高神でしょうそれが休んでどうするんですか？」

「べっつに～わしはもう人間で言う定年だし～おじいちゃんだし～とてもよくできる息子もいるし～わしは！そう！息子に最高神をゆずって引退したいんじゃぁぁぁぁ！」

「そんな最高神で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない（キリッ」

うわぁ決め顔？と言うのか？とても気分が悪くなるような笑顔でサムズアップとかありえない

「ネタはおいといてだったらなぜゆずらないんだ？」

「まだあいつは頭が固いからのう…」

すごい遠い目をしているんだが…まぁ確かに固そうだったしな

「とまぁ冗談はここまでにして行こうかのう」

そういうと最高神がまとうオーラ？みたいのを感じた

「汝は前世で幸せな顔をして死んでいった！なのに！まだ死にたくないと申すか！」

「はい！」

返事に自然と力が入る

「ならば汝を転生させてやろう！行き先は転生者が数多くいる！＜魔法少女リリカルなのは＞の世界に連れて行ってやろう！」

あぁ、長かった、とても長かったとりあえず来世にはいけるようだ。
そう思うと

目の前には

すごく息切れをしていて今にも死にそうな最高神が地面に倒れていた

「わし、今、力を使えないんじゃった」

おい今までの感動を返してくれよ

プロローグ　さらなる準備（後書き）

しつこいようですが作者は原作の設定などを知りません。
さらにまだぐだぐだ続けていき原作に行くまで時間がかかると思います。

後、なぜ時間がぐらいなのかは時計がないからです

プロローグ　という名の補足と時間稼ぎ（前書き）

プロローグがこんなに長いなんて原作にいつになったらいけるものか

プロローグ　という名の補足と時間稼ぎ

前回のあらすじ
最高神（笑）が自分のミスに気づきました

「なぁ、さっき最高神（笑）とか思ったじゃろう。」

やべ顔に出てたか？

「いや心を読んだのじゃよ。心をな。」

なんか初めて最高神と思った

「なぜ初めてなんじゃ…ちくしょぉぉぉ！ゲホッゲホッ」

「無駄に叫ぶからむせるんだよ。」

「まぁ安心するんじゃな。いまわしの力を一時的に解放してくれるように頼んでおいたから」

あれ？こいつが最高しｎ「最高神より上がいるんじゃよ…」

「わしの上にも神がいるんじゃよ。確か世界の管理者とかいわれているのう。」

じゃあ力関係はこんな感じか？
世界の管理者＞最高神＞＞＞最高神の息子＞目の前にいる最高神＞＞＞＞＞（越えられない壁）＞＞＞＞＞＞＞＞一般の神

「まぁそんな感じじゃのう。それとお前が行く世界は平行世界、パラレルワールドというところじゃなそれだから好きなように原作に介入したり原作ブレイクしていいんじゃよ。それに、お前より先に行ったやつと同じような年齢になっておるから安心せい。」

よかったこれで遅いから相手に攻撃されても逃げれる

「じゃがそれぞれの意志で年齢を変更してからいったやつもいるんじゃよ。」

あ、やばいそれって詰んだとか死亡フラグというものなんじゃ…

「安心せい。よほど目立たない限り見つかる可能性は少ないじゃろう…多分」

「おい、多分って何だよ多分って、それって見つかったら即ゲームオーバーじゃねえかよ。」

「そのためにさっきしつこくデバイスがいるか聞いたのに。」

「先に行ってくれよ。」

「お主は原作介入するつもりはないんじゃから安心すればいい。」

そうだった。俺は介入する気なんてないんだから…だがもし、もしものことが合ったら？俺が思う言葉にこうある“ポジティブに行動し、ネガティブに考えろ”とつまり楽観的に行動しながらも、悲観的に物事を考えろということだ。ピンチになったら逃げればいいそう思い考えるのをやめた

～数時間後～

「なぁほんとに原作介入して原作ブレイクしないの？」

「しつこい。」

「なぁお願いじゃｙ「失礼します。」

「何じゃよ。今説得しているのに。」

「力を一時的に使ってもいいと許可が下りました。」

「分かった。下がってよいぞ。」

「失礼します。」

部下の人？なのかとりあえずこの神から開放されるそう思うとうれしくなってきた

「なんじゃよその嬉しそうの顔は。まぁこれでお前も転生できるありがたく思え。」

やった転生できるこれで前世でできなかった事ができる！

「さぁこっちに来るんじゃよ。転生させるから。」

そして俺は最高神の言うところに行った

「じゃぁ転生させるぞ。」

「はい。失敗はしないでくださいね。」

「分かっておるでは行くぞ…」

最高神がそういうと体に何かが来る

「さぁ転生するんじゃ！場所は＜魔法少女リリカルなのは＞の世界！」

「あぁ言い忘れておった。テンプレと言われたからもちろん赤子のときから意識はあるからな。せいぜい黒歴史を作るがいい。あぁ、気味が悪いと言われて捨てられることはないからな。」

最後に最高神はこういい俺を転生させた。最後にいらないテンプレという名の最悪のものを残して

プロローグ　という名の補足と時間稼ぎ（後書き）

やっと先に進めそうですね

第一話　始まった新しき命

目を開けるとそこには知らない天ｚｙ「ほら、見て目を開けたわよ。」はい？だれだろうか、知らない女の人と男の人が目の前にいるのだが

「本当か！ああ、かわいいな！流石私とお前の息子だな！」

このテンションの高い人がお父さんになるのか、というよりも前世の父と同じ顔とは一体？

「ちょっとうるさいわよ。」

「はい・・・・すみません。」

あ、お母さんも前世の母と同じだな。だが両親が同じだと前世とあまり変わらないような気が・・・・

なんか眠くなってきた。そう思い目を閉じて眠りに着いた。

流石にあれは恥ずかしい。なぜなら赤子になっているので何もできないからだ。恥ずかしい思いをあんなにするなんて思わなかった。オムツを替えられるときが一番つらかった。だって鼻で笑うんだよ？俺のナニを見て笑うんだよ？あれはとてつもない苦痛だった。泣きたくなったがそこは必死にこらえて耐えたよ？泣きそうなのを必死に耐えたんだよ？

あぁ、自分の名前は前世と同じでしたね。両親も丸々同じでしたね。ついでに言うと家もおじいちゃんも、おばあちゃんも同じだった。ここまで同じだと軽い今までのことは全部夢で最高神も全部夢だったのか？錯覚を覚えるぐらいに不思議に思った。しかし、今までのものは全部現実であり、前世もその記憶も大切なものなのだ。だからあの記憶や思い出を“夢”と言う言葉で終わらせたくないのだ。とりあえずこんなことを考える1歳児なんているのか？と思う。離乳食はおいしくなかった。病院食を思い出して泣きそうになった。夜泣きなんてしてないし比較的おかしいほうに入るのだが両親は

「この子、夜泣きしないのよ？とても強い子だと思わない？」

「そうだな。もしかして前世の記憶かなんかあるんじゃないか？」

「そんな訳あるわけないじゃない。」

「そうだよなぁ。」

父よ何故そんなに鋭いんだ？母よ俺は強くない。ただ声を出さないように隠れて泣いているだけだ。

こんな感じで1歳児の毎日は過ぎていった。

第一話　始まった新しき命（後書き）

短いのは自分が長く書けないからです。文才が欲しい。

第二話　七五三で見た転生者（前書き）

原作に行きたくても行けない

第二話　七五三で見た転生者

はい、今私は七五三のために神社に来ています。何故自分のことを私と言っているのかと言うと俺と言うよりも私の方がしっくりくるからだ。だって、三歳の子が“俺”なんていうと他の転生者にばれると思ったからだ。そんなことを考えていると

「ほら、千歳飴だぞ。」

そう言われ千歳飴をもらう。前世だとこれが一番の楽しみだったなぁ。着物とか、きつくて動きにくいし、何故神社までくるんだよ、とか思ってたし。千歳飴のためだけに神社に来るといっても過言ではないと思う。前世でも弟の千歳飴をもらって食べていたし。そんなことを思っていると明らかに場違いなやつがいた。だってさ金髪で両目の色が違うオッドアイ？といわれる目をした子供だよ？おまけにイケメンだしさ、親もいかにも金を持っている感じでさ、両親ともイケメンと美人とかどれだけ願えばああなるんだ？とか思っているとその親子たちの声が聞こえてきた。

「ねえ、おなかがすいた早くご飯食べたい。」

「ちょっと待っててくれよ。ラルフ。」

なるほど。あの明らかに場から浮いておりそれでいて自己中心そうで、自分はすごいやつと思っていそうなやつはラルフというのか。もしも本当に転生者だったらどうしようか？

「ん？どうした？」

「えっ、なんでもないよ？きにしないで。」

「ああ、そうかならいいんだが。」

危ない危ない、どうやら考え事をしていたらしい。と言うよりも両親はあの親子をみて何も感じないのか？聞いてみよう

「あの子ってすごくない？」

「ん？あの金髪の子か？別に何も感じないぞ？というよりも俺はお前が一番だよ。」

と言い、父は私を抱き上げてこう言ってくれた。そのことがとても嬉しいと思った。

“私”は“俺”であり“俺”は“私”であるのだ。つまり俺という前の世界の人でもあり、私というこの世界にいるごくごく普通の一般人なのだ。そう思うと泣きたくなってきた。確かに俺は前の世界のことを忘れられないが今はこの世界の生きる人なのだ。

～ラルフＳｉｄｅ～

「ねえ、おなかがすいた早くご飯食べたい。」

「ちょっと待っててくれよ。ラルフ。」

そう会話をする。何故こうなったのか俺は知っている。そしてこの世界のことも。何故こうなったのか思い出してみよう。

俺は死んだのだ。何でも、神が書類ミスをしたんだとよ。なんてお約束なんだと思っていたがこの際動でもいい、なぜならばこのまま行けば神が出てきて・・・・・

「スミマセンデシタ。」

なぜかそういい土下座をする。神という者が地に座り謝ってくる。

「ついつい、うっかりミスをしてしまったのじゃ。じゃからこのことを上の者にばれないように「他の世界に転生させてくれるんだろう？」そうじゃ！話が早くて助かるのう。ん？どうかしたのか？」

まじかよ。本当に転生できるのか。やばい嬉しい！笑いがこみ上げてくる！よし！こうなったら転生特典をもらって楽しくくらしてやるぜ！

「で、転生させるための世界なんじゃが＜魔法少女リリカルなのは＞の世界でいいか？」

「ああ、別にかまわない。」

マジかよ。あのアニメかよ！これは嬉しい誤算と言うやつか？

「そしてその世界に何もなしで送るだなんて、最高神としての名が許さないんじゃ！と言う訳で何でも好きなのを言ってみよ！」

「そうだな。まずはすごいイケメンにしてくれ！もちろん金髪のオッドアイで！あとはニコポ、ナデポ、最初から最高の能力値でお願いします。ついでに両親もイケメンと美人で！」

「分かった。最高神にできぬことなぞない！」

そういわれると俺の体が変わっていく。俺のこの自分でも嫌だった容姿が変わっていく。

「よし、では幸運を祈るぞ。デバイスは転生する世界で誕生日にもらえるからな！」

そういわれた俺は光の中に消えていった。とても楽しみだなぁ♪よし！原作ブレイクしてやるぜ！

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～その後の最高神～

「楽しみじゃの～うあやつ以外にもたくさん転生者がいるというのに・・・・・まぁ詳しいことを聞かないあやつがわるいんじゃから仕方ないのう。さてと、アニメの続きでもみようかのう。あやつで何十人じゃったかのう。まぁ、後で息子に聞いてみるか。」

第二話　七五三で見た転生者（後書き）

他の転生者がでてきましたがこれから出てくるとは限りません。
ついでに言うと転生者は基本イケメンやらかっこよくだとか願っているので簡単に見つけることができると思います。

第三話　プレゼント？（前書き）

これをさ。書いているときクリスマスなんだぜ？

第三話　プレゼント？

七五三から日が過ぎて、クリスマスです。やっぱりクリスマスは楽しくやらないとね！ヒャッホーウ！
すみません。興奮しすぎたようです。さらに今自分が分からないんです。
前に《“私”は“俺”であり“俺”は“私”》なんて事を言ったせいで余計に自分が誰だか・・・・・
まぁ、それは置いといてクリスマスは子供ならテンションが上がるもの！ご馳走にプレゼントにケーキ！考えただけでテンションがあがるぜ！

「さてと、食べるか！」

「「「いただきます。」」」

父の言葉でご馳走を食べる。
うん。おいしい。というよりもやっぱり前世とほぼ同じ味だとか・・・・・
ここが本当に転生した後の世界なのか分からなくなります。前世と同じ両親や親戚、同じ家、同じ味、違うことだなんてここが海鳴市ということぐらいかな？

「どうした？食べないのか？」

「食べるよ。」

「そうか。」

このごろ考えすぎて、両親（特に父）このように言われる。母があまり喋らなくなったがただ仕事が忙しいだけなんだ。父が家で主夫をやり、母がバリバリのキャリアウーマンと言われるような仕事ぶりなのだ。

「ごちそうさま。」

そういい、洗面台まで歩いていく。三歳だけど自分で歯を磨くよ？恥ずかしい思いはあまりしたくないから。このことを親は「もう自分でできるのか。すごいな。」や「いつの間に一人で・・・・」なんて事を言っていたが過保護すぎではないか？と思うぐらいである。

とりあえず歯を磨き終わり、布団に入る。お風呂はもう入ったからいいや。そう思うとすぐに布団のところまで行く。やべ、超眠い。だんだん・・・・まぶ・・・たが・・・・そう思ったとたん深い眠りについた。

「ん・・・・・ねみい・・・・・」

目をこすりつつ洗面に行き顔を洗う。・・・・・よし、目が覚めた。とりあえず冬の水は冷たい。だから、すぐ目が覚める。とりあえず、リビングに行こうか。

クリスマスツリーの近くに、プレゼントらしきものがある。きれいに包装されているよ。なんだろうか？しかしそれよりも隣にある手紙のようなものがとても気になる。すごく気になる。どれぐらい気になるのかと言うと、とても大好きな番組がひたすたに最終回までどんどん伸ばして先がとても気になるような感覚だ。とりあえずこっちは両親のものではないだろう。そう思い手紙を見た。

拝啓

おっすわしじゃよ最高神じゃよ。そちらの世界ではクリスマスと呼ばれる祭りの最中なんじゃろ？だからわしもプレゼントを贈ることにしたのじゃよ。とてもお前にとって嬉しいものじゃろう。じゃから、わしのことを崇めたたえてくれよ！それじゃ。そういうことなのでよろしくたのむ。

敬具

テレフォンカード（最高神様直通）をてにいれたぞ！

「・・・いやいらないし・・・」

そう呟いた

第三話　プレゼント？（後書き）

これは例の向こうでも願いを叶えるというアイテムです

第四話　誕生日それは転生した日（前書き）

ちょっとずつとばしていきます。書きたいことが書けない

第四話　誕生日それは転生した日

テレカを手に入れた後、親からのプレゼントは炊飯器でした。なぜだ・・・・

とりあえず、テレカを使うために公衆電話へ、見た目3歳だが精神的なものは大人に近いはず。しかし、受話器に届かない。しかたないからおもいきり跳んだ、だが届かない。
なぜテレカなんだ！電話番号でもいいじゃないか！そう思いながらも悪戦苦闘しつつも必死に頑張る。そうだコードの部分をどうにかすればいいじゃんか・・・・・

「もしもし」

「なんじゃ、今いいところなんじゃよ。ラスボスだから早めに用件を言え。」

「なぜテレカなんだよ。」

「電話番号なんて、教えられるか！」

「じゃあなぜそこにつながるんだろうね。」

「最高神を甘く見るなよ。それくらい簡単なことじゃよ。」

「そうじゃなくて、なぜテレカに電話番号が書いてあるのかが知りたいわけなんだが。」

「え？だってそれがないと電話つながらないじゃろうに。」

「さっき電話番号なんて教えられるか！っていってたじゃないか。」

「じゃが、テレカを使わないとここには繋がらないから安心なんじゃ。」

「だが、もし落としたり、なくしたらどうするんだ？」

「そんなことはないぞ。なくしても気づくと近くにあるように設定してあるからな。」

「こええよそれ、で話は変わるんだが願いは何回まで叶えてくれるんだ？」

「まあ何回も叶えてるとつまらｎ・・・じゃなくて上の者にばれるから3回が一番可能じゃな。じゃが、話すことは可能じゃから話したいときや質問があるときはかけるといいじゃろう。」

「分かった。3回までだな。じゃな。」

「うむ。」

受話器を置くと、ピーと言う音とともにテレカが出てきた。とりあえず帰るか。親も心配するだろうから。

誕生日当日やっと４歳になった。長かった。それはそれは長い日々だった。

「「誕生日おめでとう！！」」

「ありがとう！」

そういいケーキにある蝋燭を吹き消す。うん、いつやってもこれは楽しい。

「プレゼントは何？」

「これだよ。はい。」

そう言い渡されたのは、料理道具一式（フライパン、包丁、まな板、鍋などそのほか色々）と料理のレシピが載っている本。いやいやこれを貰ってもこれをどうすればいいのやら。何？これで料理でもしろと？一回も作ったことがないんだぞ？

「これで、お前も立派な主夫だ！」

ｗｈｙ？主夫…だと…まだ結婚もしてないし、夫でもないぞ？そして母よ笑ってないで助けてくれよ…

とまぁこんなことがあったがそれなりに楽しい一日だった。

第四話　誕生日それは転生した日（後書き）

短い…もっと書きたかったのに…

第五話　誰もが通る黒歴史　前編（前書き）

ほぼ説明回

第五話　誰もが通る黒歴史　前編

誕生日の次の日、目が覚めるとそこには……

どや顔でいる最高神がいた。あぁ鬱だ…

「で何？不法侵入で訴えるよ？」

「神じゃから大丈夫じゃ。」

「神だからって何でもやっていいと思うなよ。」

「最高の神じゃから大丈夫なんじゃ。」

「上にさらに他の神がいるうえに息子よりもできないお前がか？」

「ぐぬぬ…まぁお前に能力を渡しに来ただけじゃから。」

「あぁ、動物と会話できるように。あと足を早くしてくれ。生活に困らないようにお金をくれ。だっけ？」

「そうじゃ。やっと力が戻ってきたからな。」

「そうか。」

「うむ、ではいくぞ……ハッ」

「ん？もう終わりか？」

「終わりじゃよ。あと追加でお前の思い出したくない痛い想像の能力もつけちゃったからな。」

「おい。追加の内容がひどすぎるだろ。」

「まぁこのためにお前に能力を渡さなかったからな。後、デバイスに能力を入れようと思ったんじゃが入りきらなかったんじゃが…」

「病院暇だったからたくさん考えていたからな。仕方ない。」

「じゃが、かなり多くないか？その前にどうしてそんなに冷静に対応できるんじゃ。もっと慌てればいいのに。」

「過ぎたことは仕方がない。だってもう能力つけたんだろう？」

「あぁ。でもデバイスに入りきらなかったからお前に古代遺産つまりロストロギアとして渡すことにしたから。」

「それって持ってるだけで犯罪とか捕まるとか言ってなかったか。」

「大丈夫じゃよ。そこら辺は抜かりがない。モーマンタイじゃ。」

「いや持ってるだけで犯罪臭するんだが。」

「お前以外のものが触ろうとすると痛みが走るようにしてあるからの。」

「わーお。それなんてご都合主義だよ。」

「神にぬかりなし！」

「で、何をくれるんだよ。」

「まぁ待て。誕生日プレゼントじゃからな。ここで渡すと危ないから一回お前も上に行くぞ。」

「おい。上ってどこだよ。」

「お前も言ったことあるじゃろう。では逝くぞ。」

「おい行くって字が違う気が…」

「で着いたぞ。」

「おいなんで姿が死ぬときと同じになっているんだ？」

「ここ天界じゃから、簡単に言うとわしのプライベートルームじゃよ。」

「もしかしなくても俺死んだ？」

「仮死状態じゃな。じゃからさっさと渡すからの。まずはこの太刀と小太刀、それと木刀じゃな。」

「的確に俺の痛い妄想の産物を出すんじゃねえよ。」

「まぁ仕方ないじゃろ。これがロストロギアに指定されると思うから。あと希少能力もつけておいたからの。」

「だんだん最強設定になっている気がするんだが…」

「でも、そうしないとほかの最強設定の転生者に対抗できないんじゃが。」

「なら仕方がない。痛いのもつらいのも嫌だからな。」

「じゃが、能力だけに頼るのはいかんから、今からわしの息子と戦ってもらうからな。せいぜい頑張るんじゃな。」

死亡フラグが立った。そう思ったのはこれで何回目だろうか。

第五話　誰もが通る黒歴史　前編（後書き）

話が長くなってた。

主人公紹介と人物紹介（前書き）

そういえば名前とか書いてなかった。名前が出るのはまだ先になると思います

主人公紹介と人物紹介

主人公

名前　現時点では不明

見た目　黒い髪で普通の顔。簡単に言うと印象に残りにくい。

武器　太刀　小太刀　木刀

性格　ヘタレ　チキン　ビビリ　とだめなものが詰まっている

父

見た目　どこにでもいる人

説明　結婚して主夫になる。前世の方はサラリーマン

母

見た目　普通の人

説明　結婚しても働く人。前世の方は主婦

ラルフ

見た目　金髪で右目が赤　左目が銀　イケメン

説明　最高神の書類ミスで死んでしまった人。イケメンにして、金髪のオッドアイ、ニコポ、ナデポ、最初から最高の能力値を最高神に願った。なぜ黒髪の両親から金髪が生まれてくるのか不明

ラルフの父と母
見た目　父は黒い髪で威厳のある顔でしかもイケメン　母は長い髪で美人

最高神
説明　すごいアニメやゲーム好き。おじいちゃんのような見た目。最高神なのに地位は最高神の中でも一番下で息子に抜かされている。なぜ、息子に最高神の座を渡さないのかというと、アニメやゲームを買うための収入源がなくなるから。

最高神の息子
説明　恐い人でも、優しい人。気まぐれ。とても強い、どれぐらい強いかというと初期から能力が強くゲームだったらレベル１でもクリアできるくらい。

世界の管理者
説明　最高神より上の存在。女の人らしい

主人公紹介と人物紹介（後書き）

主人公設定は出てきたら追加かあとがきで簡単に説明します。

第六話　誰もが通る黒歴史　後編（前書き）

もう大晦日とか。時間が早く過ぎる気がする

第六話　誰もが通る黒歴史　後編

あらすじのようなもの
立った！死亡フラグが立った！でも死んでるんですけどね。

「なんじゃこのあらすじは。」

「心の心境です。」

「まぁ死なない程度にがんばりなされ。」

「他人事だな。」

「他人じゃからな。」

「で、俺は誰と戦えと？」

「ああ、この前転生したやつじゃよ。」

「あの子供か。だが戦えるのかよ。一度も戦ったことないだろう。」

「しかし、能力だけに頼ったら技術や能力がいつまでたっても進化しないじゃろう。じゃからお前に頼みたいのじゃよ。」

「分かったよ。親父の頼みだからな。」

そういい、なにかぶつぶつというと目の前の風景が変わった。

「よしじゃあやるか。」

「あのぅ、なんでそんなにやる気満々なんですか？」

「久しぶりだからな。殺るき満々だから死んだらごめんな。」

「もう死んでるからいいです。」

「よし、よく言った！やはりお前は面白い！」

そう言い、手を前に出す。そうすると手に槍のような棒状のものが出てくる。

「やるしかないのか…」

そう言い俺も貰った小太刀と木刀を構える。想像していたものと同じように右に木刀、左に小太刀を構える。想像と同じならば効果も能力もほぼ同じだろう。

「では、はじめるぞ。はじめい！」

「先手必勝！」

そういいおっさんが突っ込んでくる。うん、怖ええよ。笑いながら槍を前に突き出しつつ、フンッとかセイッとか乱れ突きやなぎ払いをしてくる。そのたび俺は、オウとかヤベとかいいつつ防戦一方だ。

「どうした？攻めないと勝てないぞ？」

「くそッ！やってやらぁ！」

木刀を戻し太刀にする。そのまま太刀を振るう。軽い、これならいける！

「おおおおおお！」

キインと高い鉄同士がぶつかる音がする。能力がそのまま使えるのなら！

「いけッ」

「む。」

俺が出したのはたくさんの剣。これならかわせない！

「甘いな。」

そういわれると俺は倒れていた。

「能力は強いがまだお前は強くないな。」

そういわれると、急に眠くなってきた。

第六話　誰もが通る黒歴史　後編（後書き）

戦闘描写が難しい

第七話　能力の把握（前書き）

あけましておめでとうございます

第七話　能力の把握

「でさ、お前は自分の能力と武器をどれぐらい知っているんだ？」

「思い出せるのは、武器はほぼすべてだけど最高神が三つだけで頑張ってといわれたのでこれだけですかね。能力は大体分かります。」

「じゃあ、武器の名前は？」

「魔王の太刀と魔王の小太刀ってなに笑ってるんですか。」

「厨二乙。妄想乙。ｗｗｗ」

「ひでぇてかキャラ壊れてませんか？」

「これが素の俺だよ。あんな堅苦しいものいつまでも続けられるかッてんだよ。」

「ですよね～。」

「その木刀は？」

「暁でしたかね？」

「なぜ暁なんだよ。」

「某ボディーガードのゲームがあってそこからとりました。」

「効果というか能力は？」

「太刀は何でも切れる。小太刀は何でも防げる。木刀は折れないし、鉄でも切れるというより太刀と小太刀の効果を半分ずつだった気がします。」

「やはり妄想だな。お前矛盾という言葉を知っているか？」

「それぐらい知ってますよ。そもそも太刀と小太刀の切れ味や能力は思いの力で変わるんですよ。攻めるときは太刀のほうが上になり、守ろうとすると小太刀が上になります。」

「で他にはまだあるのか？」

「ありますよ。どちらかというと希少技能？と呼ばれるものになるといってましたけど。」

「でそれはなんだ。」

「魔王の鎧とロードクラウンですね。」

「なんで魔王なんだよ。もっとほかにあるだろう。」

「魔王って強くてかっこいいじゃないですか。自分の信念の元に戦うとか。」

「すまんが、理解できない。で効果は？」

「ほぼチートのすべての攻撃を跳ね返すと鶴の一声というより催眠や暗示に近いものだと思いますよ。」

「すべての攻撃を跳ね返すとか小太刀いらないじゃないかよ。」
「鎧は基本見えないし、常時展開ともできないから仕方がないよ。」
「そっちの王冠もどいだろう。暗示とか催眠とか使えば簡単に勝てるじゃないか。」
「使うときは限定されるから大丈夫だし、使おうとか思わないよ。ただの飾り。」
「そうか。ならいいんだ。他は何があるんだ？」
「よくあるものばかりですよ。超回復だとか瞬間回復だとか。でも基本は創造力“想像や妄想、空想を現実に創造する”というシンプルな能力ですよ。」
「そ…そうかやっぱりチートだな。」
「仕方ありませんよ。思い出したくない過去を思い出さないと死ぬかもしれないんですから。」
「他の転生者…か。」
「ええそうです。」
「だが俺の親父だけでなく、他の神もミスで転生させているからな。
「え、でも同じ世界じゃなくて平行世界（パラレルワールド）に送ればいいんじゃ。」そうは行かないんだよ。同じところに行かせてどうかわるのかを見るために送るのだから。」

「迷惑な話ですね。」

「そうだな。」

「じゃ、帰ります。」

「どうやって帰るんだよ。戻してやらないぞ。」

「大丈夫です。これがあれば。」

「太刀がどうしたんだ？」

「まあ見ててくださいよっと。」

「これは…空間を切ったのか？やはりチートというか規格外だな。」

「そりゃもう妄想の産物ですから。じゃ帰ります。」

「気をつけろよ。」

「分かりました。」

そういい俺は元の場所に帰った…どうやら俺以外の人にはこれらの道具は見えないらしい。

第七話　能力の把握（後書き）

これらは実際に黒歴史ノートとよく言われるものに書いてありました。それにしても地の文を書かないほうが楽とか…

武器　能力紹介（前書き）

どうしてこうなった

武器　能力紹介

武器

○魔王の太刀
能力　何でも切れる。たとえ空間だろうとドアだろうと結界だろうと魔法だろうと切れる。ただし思いが弱いと能力もそれに応じて弱くなる。しかし弱くなっても強い。

○魔王の小太刀
能力　如何なる物からも守る。というよりも太刀と相反するもの。やはりこちらも思いが弱いと守りが弱くなる。しかし弱くても強い。

○木刀　暁
能力　御神木から作られた木刀。太刀と小太刀の能力を半分ずつ使えるようなもの。ただし、思いで労力は変わらないし空間も切れない、守る範囲も狭い。しかし、折れないし切れ味も落ちない。

希少技能（レアスキル）

○創造力
能力　想像つまり頭で考えたことを現実に持ってこれる。しかし魔力が必要なのでこのままだと使えない。使えれば圧倒的強さを誇る。

○魔王の鎧
能力　すべてを反射させる鎧というよりもバリアのほうが近い。範囲は魔力によって変わるのでこれも中々使いにくい。普段は自分の周りのみ展開している。効果的にはドラ○エで言うアタックカンタ、マホカンタ、吐息返しなど。

○ロードクラウン
能力　別名　魔王の王冠と呼ばれるもの鶴の一声ならぬ魔王の一声。暗示や催眠効果を持つ。しかし、これも魔力がなくては使えない。だが、使うことはない。主人公曰くただの飾り。

○瞬間回復・超回復
能力　これさえあれば普通の傷ならすぐに治る。なぜデメリットがないかというと原因不明の病だったためそれらをなくしたいという願いがあったため。

武器　能力紹介（後書き）

いつのまにか最強設定に…まぁでもデメリットや欠点もありますからね。
設定がかぶっていたら申し訳ない。

第八話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　１（前書き）

この話は書きたかった。でもうまく書けるか不安。
ここからオリジナルの設定がすこしづつあります

第八話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　1

気づいたらもう五歳になっていた。毎日武器や能力を少しづつ使い、技術や能力などを使いこなせるようになったが魔力関係は使えない。まぁ、太刀と小太刀それに木刀にも魔力はあるからそれらから供給してもらえばいいことだし。

「よし、今日も終わりだな。だけど見た目が変わらないし、筋肉がついたようにもおもえないんだよな。」

そう、最高神から能力を貰ったあと毎日親が起きない時間。深夜から夜明けの時間ぐらいまで練習している。魔力がないから魔法が使えないけど結界は使えるとかおかしいこともあった。その前に、レアスキルが何故こんなにあるのかと疑問に思った。最高神がいうには「生き残るためとお前の基本の創造力で次々に創っているから。」と言われた。その後「おそらく“創造力”が一番のレアスキルなのだろうから管理局には気をつけるんじゃぞ。」とも言われた。

「今日は“サルでも分かる魔法のいろは　～初級から上級まで～”でもやるか。」

自分の小太刀とレアスキルで創った結界の中で毎回試しているが、魔力がない魔法として出てくるため魔法ではない物が出てくる。最高神の息子が言うには「“創造力”が働いているから、魔法の形だけ出てくるんじゃないか。」との事

「もう時間か…仕方ない。」

とりあえずもう五歳だ。大事なことだから二回言った。もう幼稚園

の中はカオスになっている。転生者と思われる人たちがうじゃうじゃといるのだ。大体が年中組の中にいる。他の年長や年少にもいる。もうみんな転生者は自分の能力をオン・オフで切り替えずにひたすらオンなのだから笑うと悲鳴に似た叫び、女子の頭撫でると顔を赤らめる。あぁ、欝だ。そんな中俺は部屋の隅っこに行き体育座りで、最高神の息子さんのオリと話す。名前は念話と一緒に教えてくれた。魔力がないため三つの武具はいつも常備している。軽いからそんなに気にならないし、邪魔にならない。最高神の優しい心遣いだとか。

『あぁ、もうやだ。この幼稚園』

『そんな事いうならやめればいいじゃないか』

『そうはいかないからやなんだろ』

『それもそうだな』

『あぁ欝だ』

『頑張れよ。俺仕事だから』

『りょーかい』

とこんな感じに親しくなったのだ。いいやつだよなぁオリって。愚痴に付き合ってくれるし、仕事もできて強いとかありえない。

とまぁ、こんな感じで幼稚園の一日が過ぎていく。授業とかできないよ、だって授業にならないし。

～ある日の日曜日～
「今日は遠くに行くぞ。」
「どこに行くの。」
「山とか海、自然あふれる場所だぞ。ほら準備して来い。」
「分かった。」
とりあえず、三つとも持っていこう。家においておくと不安だし。
というより気づいたら近くにあるもんなぁ。
ところ変わって車の中
「幼稚園は楽しいか。」
「楽しくないよ。だって、みんな恐いから…」
「そんな恐いのか。」
「みんな目が恐いんだよ。男も女も…」
「そうか…」
あぁ、話が続かない…もう寝ようか。

第八話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　1（後書き）

タイトルの意味は後々出していきます。

番外　明けましてって昨日だろ（前書き）

注意　この作品は外伝のようなものです
そしてこれは作者の愚痴です。
さらによく分かってません。番号をぶった切りました。
楽しい気分を失いたくない方は見ないほうがいいかもしれません。

番外　明けましてって昨日だろ

あらすじ
作者がぐれました。

「おい、このあらすじってなんだよ。」

「聞いてくれるか？」

「なんでここに居る？そしてここは何処だ。今は家族と自然あふれる場所に行くところだっただろう。」

「聞いてくれるのか？」

「何この無限ループ。オリ助けて！」

「聞いてくれるのか！」

「いや聞かないし。」

「あのな。これは昨日書きたかったんだ。だけどもお正月だからって調子に乗ったのが悪かった。
家に帰ってさぁこの気分で書こうと思ったら「あれ？部屋の様子がおかしい」と思ったら・・・」

「おいどうした。」

「まさかのフィルタリングだよ！まずモ「ピー」やろうと思ったら、不適切サイトだし。このサイと開こうと思ったら、このサイトも不

適切だし・・・」

「さっさと続き言えよ。」

「で、親が勝手に俺のパソコンをいじり、保護の何かを入れたときにフィルタリングを掛けたらしい。
でもさ。保護もフィルタリングも必要だけども！だけども！急にできなくなるとか！」

「お・・・おう。」

「昨日はいつもなら起きている深夜に寝ていたんだ・・・でも現実は甘くなかった。
まさかの朝。誰も居ない！チャンスだ！と言わんばかりにパソコンのフィルタリングをどうにかしようと思った。
だが何もできなかった・・・
以前弟がフィルタリングを解除したときのように頑張ったさ。でもできなかった。
で、俺が物に当たるのは悪いと思いながら色々殴ったり蹴ったりしたさ。でもそれもいけなかった。」

「まさか・・・・」

「殴ったら手から血出てくるわ、間接のところの皮剥けるわ、決め付けは蹴ったときに足の右中指がポキッと右がわに曲がるし爪はぼろぼろになってるし足の先の肉は抉れて真っ赤だし絆創膏もはるとすぐに血がにじんで意味がなくなるし、泣こうと思ったらなに馬鹿やってるんだと思ったら笑いがとまらなくなるし・・・・・」

「なんだよ。明らかにお前が悪いだろう。」

「そう思うけど、不貞寝したらもうこんな時間だし。朝の5時におきて馬鹿騒ぎして寝たらもう12時間たってるし。」

「じゃあ何でできてるんだよ。見れないはずだろう？」

「弟が朝の馬鹿騒ぎを聞いて親に言ったらしい。で、パソコン付けたら「何故できる・・・」と呟きながら書いているわけ。」

「そうかならもういいだろ。帰れ。」

「そうだね。もう書き溜めて予約してあるし、一月の最後まで予約あるから・・・」

「勉強しろよ。」

「面倒。そしてやる気なし。これから「ピー」なことや「ピーーーー」なことがお前に起こるからな。」

「だが、この作品見てる人がいると思うか？お気に入りはちらほらあるが、駄文だし、感想ないし・・・」

「いいんだよ。これは作者の妄想の垂れ流しで、糞な文なんだ。それにお前はもともと違う想像のキャラだったんだ。」

「なん・・・だと・・・」

「もともと開示していない作品で書いていたのさ。だが友達が「リリなのって面白いぜ」っていうからだったらと思って書いた。寧ろ断片的なことしか知らないから原作ブレイクだからな。」

「さらっとそんなことを言うなよ。アホか。」

「アホでもいいのさ。ゴミでも蛆虫でもいい！！」

「なんてマイナス思考。」

「そんなことはおいといて皆さんこの作品『魔法少女リリカルなのはって何？』を見ていただきありがとうございます。
この先も続いていくと思うのでこんな糞みたいな作品を見ていただいているだけで嬉しいです。
では皆さん、明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。」

「でも普通昨日だよな。明けましてって昨日だろ。」

「うるさい！」

番外　明けましてって昨日だろ（後書き）

はい。最後まで作者の愚痴を見ていただきありがとうございます。
今回出てきたのは、主人公と私、平民でございます。
対話は地の文より楽！これだけは言える！
皆さんにとって今年がいい年でありますように。
新年早々に私みたいに怪我しちゃ駄目ですよ。

第九話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　２（前書き）

タイトルが悪い意味で詐欺になりそう。
この話はいやな気分になるかもしれませんので、新年早くからのいい気分をなくしたくない方は見ないでください。
しかしこの駄文の妄想の垂れ流しを呼んでいる人はいるのだろうか
…

第九話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　2

そこは自然に囲まれた場所だった。周りを見れば木々がたくさんある場所だった。

「さて山登りでもしながら自然を眺めるか。」

「ええそうね。」

親の話を聞くには山を登るらしい。たまにはリフレッシュでもするかな。

～山登り中～

「お父さんだらしないよ。もっと速く行こうよ。」

「ちょ…ちょっと待ってくれ。」

父が息切れをしながら登ってくる。俺？俺は修行しているからこれぐらいじゃ息は上がらんよ。母は俺と同じくらいに登ってくる。息切れしている父とはまったく正反対で疲れが見えない。

「あなた、運動不足なんじゃないの。」

「何故そんなに余裕なんだよ。」

「取引先に行くときは自分の足で行くのが基本ですから。」

「ああそうかい。」

～さらに山登り中～

「そ…そろそろ戻りませんか？」

「あら。どうしてかしら？」

うわ、今すごくいい笑顔で言い放ったよ。父はすごい悲しい顔してるし、こう…捨てられている犬みたいな懇願しているような顔。

「いいでしょう。」

「ありがとうございます。母上様。」

母から許可が下りた瞬間、いい笑顔になったよ。さっきとはえらく違う。

「じゃあ帰るぞ。」

「分かった。」

そのときだった。何かの視線を感じる。品定めをしているような、ねっとりとした感じだ。父と母には向けられていない。どうやら俺だけのようだ。これが思春期特有の被害妄想というやつか…いやそんなはずはない。まだ続いている。ヤバイこれはヤバイ。全身から嫌な汗が吹き出る。

「どうしたの？顔色悪いわよ？」

「な…なんでもないよ。」

母に強がりを言う。恐い、怖い、このような状態を恐怖というのだ

ろうか。その前に一刻も早くこの山から抜け出したい。キモチワルイ視線から抜け出すために。

〜下山中〜

気づくと嫌な視線は消えていた。しかしまだ鳥肌は収まらなかった。あの視線は何だったのだろうか…思い出すと怖くなってきた。早く帰ろう。うんそれがいい。

〜帰り道　車の中〜

「ああ、久しぶりに疲れたなぁ。早く帰って寝たいよ。」

「その前に夕食を作って寝てくださいね。」

「善処します。」

そんな毎日のようなやり取りをしていた。やはりこう毎日が変わらないことって素晴らしいことなんだよな。非日常よりも日常だよ。身を守る能力があっても使わないように生きて生きたいよな。

でも、そんな小さい小さい願いでも世界は無常に引き裂いてくる。

…そう俺が急に死んだように…

帰り道俺と両親が乗っている車にトラックが突っ込んできた。これを機に俺の人生は大きく歪み、それに応じて俺の生活も何もかもが変わってしまった。

第九話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　２（後書き）

タイトルの言葉は作者が好きな言葉です。そして、どうしてこうなった。

第十話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　3（前書き）

この話も嫌な気分になります。注意しましたからね。あぁ欝だ…

第十話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　3

トラックが突っ込んできた。そのときのことはよく覚えている。父が思い切りブレーキを踏みキキーッという耳に残るような高くうるさい音。母が俺を抱きしめてくれたこと。トラックの光がまぶしかったこと。あげればきりがないようなことがたくさんある。しかしこの後の光景を俺は忘れないだろう。

なぜならば…

鼻につくようなガソリンのきついにおい、その中にある血のむせ返るようなにおい、母が俺をかばうようにして…長い鉄の棒のようなものに刺さっていること。そして他の鉄の棒が俺の胸に突き刺さっていることを確認したときの言葉にできないほどの後悔や悲しみに包まれている顔…そして、真っ赤に燃える炎の中で父がミラー越しにこちらを見て母と同じような顔をしていたことを・・・・・・・

結果から言えば俺だけ助かった。

理由は簡単、レアスキルの回復系統だ。超回復で傷の進行及び血の

失血を抑えつつ、瞬間回復で細胞の死を回復していったことだ。さらに人が死ぬときや生命の危機になると生存本能が働くため、いつもよりも回復が早かった。
医師が言うには絶対に死ぬ傷だったのに生きており、回復も早い。とのこと、しかし俺を待っていたのは人の嫌な部分であった。

数日後俺は無事に退院した。お金は口座から引き落としてくれと頼んどいた。だが俺を待っていたのはゴミを見るような冷たい目をしている父の弟と母の姉だった…

そこからが大変だった。葬式をやるための準備、それによる遺産の手続き、俺を引き取るかといったことだ。しかしこの内容はひどく嫌なものだった…

「どうするんだよ！この子供！こいつがいると遺産が貰えないじゃないか！」

「大丈夫よ。こんな子供言いくるめれば大丈夫でしょう。」

そう言い父の弟とその妻がしゃべっていた。キモチワルイ。なんで自分の身内が死んだのに、金の話をしているんだ。また、母の姉も

「あなた！子供が残ってるじゃないの！死んだはずじゃないの！」

「知るかよ！俺が聞いたら死ぬような大怪我で助からないといわれ

たんだから！」

「なんなのよそれ…人じゃなくて化け物じゃないの！」

「だが、引き取らないと遺産は第一の身内のあの子供にはいるんだぞ。」

「だったら、さっさと引き取って施設にでもいれればいいじゃないのよ。」

と聞こえた。この人たちもキモチワルイ。どうしてこんなことを本人がいる前でいえるんだよ。子供だから分からないってことか。だが、あいにくと中身は子供じゃないんでね。

「おい。どうするこの化け物は。誰が引き取るんだよ。」

そう父の弟が言うと、俺の知らない親戚の人が集まり話し始めた。

「まず、遺産は第一相続者のあの化け物に入る。だから、引き取るのは慎重にしないと。」

「お金は欲しいけど…あんな人じゃない奴誰が引き取るのよ。」

「まったく、嫌なものまで残していきましたねぇ。」

「まったくだ。」

「じゃあさ。言いくるめて遺産をあいつ以外の遺族で分けようぜ。」

そう言い終わると母の姉がこちらに来た

「ね～ぇ。僕、両親が死んでつらいのは分かるけれども、遺産って言うものがあってね。それを分けたいんだけどもさ。あなた要らないわよね！はい決定！」

と一方的に言われて親戚が集まるところでは、やったなとか、これで生活が楽になった。とか詩文の都合のいいようにしゃべっている。

あぁうるさい。ナンデソンナニタノシソウンシャベッテイルノ？オカシイジャナイカ。ミウチガナクナッタノニ…

「う・・るさ・・・い」

もうなにがなんだかわからない。もういやだ。こんなところ一刻も早く抜け出したい。しかし

「そうだよ！あいつを施設に入れるんじゃなくて生物研究（モルモット）の被験者にすればいいんじゃないか。そうすればかなりの金もはいるぞ。」

「どこに入れるのよ。」

「薬の被験者や、実験の対象になるところにいけばいいんじゃないか？それにあんな事件なのに生きているのだから有名だろ。」

「それもそうね。」

あぁもうだめだ。頭が割れるようにイタイ。前世の体が動かなくなった時と比にならない位に…

「うるさいんだよ！！！金がそんなに欲しいならくれてやる！！！

だからもう、俺の目の前に二度と現れんじゃねえ！！！」

そう親戚どもに言い放った。いやもう親戚でもなんでもないか。ただの他人。遺産はその手切れ金だと思わせればいい。そう思いながら、公衆電話へ駆け込んだ。

第十話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　3（後書き）

この話をよんで気分が悪くなったりした方がいましたらごめんなさい。
そしてこれは妄想の垂れ流しです。軽く流す感じでお願いします。
書いているとき昼ドラみてたからか…

第十一話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　４（前書き）

どうしてこうなった。そして、原作までいかないという。

第十一話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　４

公衆電話に向かった俺は神への電話をする。

「なんじゃ。今いいところ何じゃが…「いいから、願い事を言う。」なんじゃよ。そんなに怒って…一回リラックスじゃよ。深呼吸、深呼吸。」

そう言われたので深呼吸をする。すー。はー。よし

「で願いなんだが。」

「その前になんで、そんなに怒っているのかが分からん。理由を説明してみるがいい。」

「間単に言うと、両親が亡くなった。それで、その親戚たちが嫌になった。それだけだ。」

「なるほどのう。人の嫌な部分を見たということか。」

「ああ、そして願いだが…“親戚から俺の記憶を消してくれ”」

「またなんでそんなものを…お主を知っている人がいなくなるんじゃぞ？」

「別にかまわない。家に無断で侵入されるよりましだろ。」

「それもそうじゃな。まぁ、わしもわしの息子もお主を知っているからの。」

「そういってくれると助かる。」

「ふむ。では行くぞ・・・・・終わりじゃ。そして話を聞くためにこちらに来てもらうからな。」

そういわれると、俺は光に包まれた…

「で、なぜこうなったか。詳しく教えてもらうかのお。」

そういわれたので最高神とオリの前でこれまでのことを話した。山に行ったことから事故にあったことまでを…

「大体分かったんじゃが、その親戚は今どうなっているんじゃ？」

「まあ待ってろよ。親父…お、これだこれ。」

そう言われて見たのはさっきの景色、俺が出たときと何も変わらない。いや、変わっているのは俺がいなくなったことにより誰が相続するかと言い合っている。

「なんともまぁ…汚いのぉ。」

「これが珍しいほうですよ。おそらくかなり遺産があるんだろう。なぁ坊主。」

「誰が坊主だよ。確かに働いているのに最低限のものしかなかった

気がします。」

「む。何故そんなに他人事なんじゃ？なぁオリよ。」

「それは俺も気になるな。」

「簡単なことですよ。ロードクラウンで自分に暗示をかけたんですよ。」

「あれはかざりじゃないのか？」

「自分にかけるくらいなら簡単ですよ。だって俺は化け物ですから。」

「なぁ、おぬｓ「あんまり思いつめるなよ。坊主はいつまでも坊主なんだから。復讐や自棄になるなよ。困ったら俺にいつでも念話していいからな。」ちょ、わしが言いたいことをってか何でオリと念話できるｎ「ありがとう。オリ。」しかも呼び捨て！？何でこんなに親しいの？何？わしって空気なの？」

いじけてしまった最高神を慰めるため時間がかかった。そして、最高神の名前オリエアと念話を教えてもらった。自分名前を息子につけるとか…と思った。

第十一話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　４（後書き）

何故こうも悲しい事があるのが主人公だろうか…
しかしこれは、もし最高神のオリエアが主人公に能力をやらなければこんなことにならなかった。
その前に、主人公が消えたくないといわずにそのまま消えてしまったら。などとあげればきりのないような事です。簡単に言うと、欲張ったからこうなったんだと思います。

第十二話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　５（前書き）

そろそろ原作入りしたいなと思う。今日この日
そして今日テレ東でＳｔｒｉｋｅｒＳが放送される…原作行きたいよ

第十二話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　5

オリとオリエアの好意？厚意？でお金の心配はないらしい。しかし、新聞を見せてもらったとき驚いた

＜居眠りでの事故！！トラック激突で一家死亡＞と書かれていた。

「なぜ、俺は死んだことになっているんだ。それに相手は一切悪くないとか。」

「簡単なことじゃよ。死亡届をあいつらが出したからじゃ。まぁその死亡届もなかったことになっているがのう。」

「まぁ、思いっきり心臓を一刺しですからね。仕方ないといえば仕方ないでしょう。それに能力がほんとにチートじゃないすか。死んだ人が生きているとか。」

「そこが最高神クオリティじゃよ。願いをひとつの間違いなく反映させる、これがわしの最高神パワーじゃよ。」

「クオリティかパワーかどちらかにしろよ。」

「じゃ、クオリティで。」

「ああ、そろそろ帰るわ。じゃあね、また今度。」

「うむ。じゃあ送ってやｒ「よっと、じゃね～。」なんで！？」

「あいつの太刀は何でも切れるらしいぞ？向こうからもこちらに来れるようだし。」

「なんて物をわしは創って渡したんじゃ…」

「後悔しても遅いぞ。坊主は能力も武器も使いこなせるようになっていたからな。」

「いくらか早いんじゃ…」

「もともとあいつの妄想とか想像だろ。だから使い方も知っているんだろ。」

「そうじゃのう。まぁあいつの世界は元はアニメじゃが、もう崩壊は始まっているからのう。」

「そっちの方が大変だろうに。」

「まあ、これも楽しみじゃから仕方あるまい。それに、あそこをただの二次元だと思っている奴らより、現実を見ているあいつの方が楽しいし。」

「それもそうだな。」

～自宅～

「さてと、どうしたものか。気づいたらもう、来年小学校だからな

ぁ。」

そう、ここで運命が決まるのだ。私立聖祥大学付属小学校に行くか。それとも別のところに行くかだ。だが、親は私立のエスカレーターの方がいいとか行ってたしな。ということは、あの遺産は俺の学費？…あ、なみだでてきた。ヤバイ、マジ泣きそう。

～しばらくお待ちください～

よし、落ち着いた。まぁ紹介文見みたいなのに共学と書いてあった。まぁオリエアが行っていた崩壊が始まっているんだろうから。仕方がない。とりあえず疲れた。もう寝よう。

こうして俺の人生が変わった出来事が終わった。

俺は…

普通の毎日がいとも簡単に消えることに“絶望”し

簡単に日常が消えてしまうことに“憎悪”し

手のひらを返すように消えていくことに“裏切り”を感じ

自分自身の行動や身勝手で消えることに“憤怒”を感じた

結局、これらも自分勝手なことなのだから仕方ないといえばそれで終わりなのだろう。

第十二話　絶望　憎悪　裏切り　憤怒　５（後書き）

ひとつ原作と違うことが出てきました。そして一区切りが終了しました。
これで原作に進める。

第十三話　代償（前書き）

とりあえず投稿
注この作品は妄想の垂れ流しです。
だから細かいことは気にしないでください。

第十三話　代償

全てのものに代償がある。

それは、物を買うときにお金を払うように。

それは、浮気をした後の離婚だったり。

それは、大きな力を手に入れた事ですべてのものが大きく変わったり。

あげればきりのないような事だ。

「おい。化け物が来たぞ。」

この言葉を聞いたのは何回だろうか？百回？千回？いやもっと多くだろう。

何故こう呼ばれるのか。理由は

事故で死ぬような怪我で生き残ったからだ。

どうやら、園のほうには死んだという情報が流れたようだ。だから化け物と呼ばれるんだろう。
これは、仕方がない…
だが、命を狙われるのは別件だろう。
あんな新聞にも載るようなことだったし死亡と扱われていたことから転生者と思われる方から攻撃を受けていた。
まぁ、とても弱いものばかりだからな。オリよりも弱い。というより能力のみに頼っているし、同じ能力の人もたくさん来ている。
そもそも固有結界とか心象風景を現実に出すものだろう。だから、使った奴らは驚いていた。
だって、何もない場所なんだぜ。ひとつのものもないただ広いだけの空間。使った奴らはなぜ無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）じゃないんだ。とか言ってたかな？

まぁ人の噂も七十五日と言われるものだし。まぁ無視だな。
とこのような毎日を繰り返していた。

幼稚園に行き、家に帰り、ご飯作って、転生者が来たら撃退して、寝る。
この毎日を繰り返す。まぁオリとオリエアとの会話は楽しいからいいけれども。

ある日森に行った。
とりあえず毎日の日課になってしまっている練習をする。

え？戦闘狂じゃないですよ？
イヤイヤ、本当に。戦うのも嫌だし痛いのも嫌なんで渋々やっているだけですし。
できるなら、戦わずに生活出来たらと思いますもの。

「封血結界七重式」

とまぁ毎回このような結界を張る。
封時結界と変わらないが違うところは魔力を使わないところか。
魔力の代わりに名の通り血を使っている。七重なのは、一枚だとすぐに壊れるからだ。七重ぐらいがちょうどいい。名が痛いのは仕方ない。

「今日もぼちぼち頑張りますかね。」

そう言い、太刀と小太刀を構える。相手はオリと瓜二つの人形だ。
簡単に言うと自分に暗示をかけて見えるようにしている。痛覚などの感覚もリンクしているから現実的に戦える。

太刀を思いっきり振ると空間ごと引き裂く。やっぱりありえない能力だなぁと思いつつ戦う。
幻覚なので絶対に倒れない。やっぱり新技使おうかな。と考えているが技が思いつかない。
そんなことを考えていると攻撃を食らう。その瞬回俺は意識が落ちた。

気づくとそこは大きな自然に囲まれた森だった・・・・・
はい。気絶していただけです。結界も壊れてないし一人で新技でも開発しようかな。
創造力で出来ぬもの無し！！！
といったが中々うまくいかないんだなこれが。まぁ太刀一振りであ

たれば一撃で基本沈むからいいかな。そんな事思っていた時俺にもありました。
でも新技だよ？カッコいい技でも地味な技でもいいからバリエーションを増やしたいんだよ。
何で振り回しているだけで相手が引き裂かれるんだよ。もっと業が欲しいよ。
と考えているとそこにある茂みが揺れた。
ビクッと肩どころか全身で表現した俺は悪くない。だってここは結界の中だ。出て行くことは出来ても入ってくることは不可能なんだから

「アハハ。ジョーダンキツイデース。」

なぜかこう喋ることしか出来なかった。まだがさがさと揺れている。
これはポケットなモンスター見たいなエンカウントか、それとも竜の探求みたいなエンカウントか。
前者なら捕まえるか逃げればいい。
だが後者の場合は戦うしかない。俺はモンスターマスターでも魔物使いでもないからな。
とりあえず覗いて見よう。そう結論を熱い脳内会議の末出した。

「逃げちゃだめだよなぁ。」

そう呟き覗く。テレテレとエンカウントの音が聞こえるかと思ったら聞こえなかった。
いたのは狐。怪我をしている。
まぁ治してやるか。そう思い怪我を治してあげた。

第十三話　代償（後書き）

竜の探求、ポケットなモンスターわかりますよね？
狐は作者の好きな動物です。

第十四話　助けたからって良い事があるわけじゃない（前書き）

まさか全部消えるとか…ないわぁ

第十四話　助けたからって良い事があるわけじゃない

あらすじ
怪我をしている狐がいる。どうする？　⇒助ける
助けない

とりあえず怪我をしているので治してあげるか。それに新技の対象になってもらおう。
怪我をしている部分は前足の右、体の背中に切られたような傷、そしてべったりと血の着いたし・・っぽが・・・・ってアレ？オカシイナナンデシッポガココノツモアルンダ？マダゲンカクヲトイテイナインダッケ？って現実逃避はやめよう。
早くしないとモフモフとした尻尾が血でべったりで駄目になってしまう。

「手をかざしてっと。」

そう呟き傷に手をかざす。そうするとあら不思議！傷どころか血までが消えました。

「ぐおお・・・・いてて。」

この技の欠点は、傷を自分に移し変えること。だからこのような場合は自分の右手から血がだらだらと出ており、背中は焼けるように痛い。尻尾はないが足の方がものすごく痛い。
おい。回復系統の能力仕事しろよ。このまま行くと天に召されるぞ。

「あー。服が血まみれだよ。」

とても血の臭いが半端ない。生臭いと言うかなんというか…そんなことを思うと目を覚ましたようだ。

「む。誰じゃ。」

おおう。すげえ睨んでらっしゃる。怖い怖い。

「自分から名乗るのが礼儀じゃないですか。」

まぁ名乗るときは自分からの方が何かといいし

「私は世界の管理者じゃが…お主は何故笑っておる。」

「いやぁそんな喋りをする知り合いがいるもんで。」

「その知り合いとは誰じゃ？」

「最高神と言っていたオリエアという方ですよ。」

頭をよぎったのは最高神と名乗っていたオリエアだ。その前にセカイノカンリシャと言う言葉が…

「ああ、あいつか。いつもミスばかりしており、アニメとゲームが大好きな引きこもりか・・・・で、なぜそいつを知っておる。」

まぁ世界の管理者は、オリエアより上の存在だしこの人も上の方絡みだし、本当の事いうか

「転生者ですよ。」

そう言うと目が変わった。憎しみや侮蔑の篭った冷たい印象の残る目で睨まれる。俺はMじゃないからなんにも感じないが可愛いと思ってしまった。

「なぜ、転生者が私を助ける？さっさと殺せばいいだろうに。」

「話の内容がつかめない。だから誰か状況が分かるように説明プリーズ。」

「なんで、私を殺そうとしたのに助けるといっているのか。と聞いているだけだ。」

「殺そうとするわけないじゃないですか。とりあえずあそこで覗いている奴は切り捨ててOKですか？」

「お主視えるのか？」

「化け物なんて名前で呼ばれてるんですよ？これぐらい出来ないと。」

「そうか…なら私の味方というのならあいつを追っ払ってくれ。話はその後じゃ。」

「りょーかい」

そう言うと思い切りそこまで文字どうり跳んだそして落下する勢いのまま木刀を振り下ろす。ゴスッと鈍い音がした。

あっけない…そう思うと後ろから鎖が飛んできた。

「アブねえなあ。」

「何故よけられる。死角から襲ったのに…」

「化け物なめるんじゃねぇと言うことだよ。」

そう言い終わると同時に太刀で斬った。もちろんその周囲の空間ごと切り裂いたよ？今頃どこか遠くの異世界だろうねぇ。

「ほい。終わったぞ。」

「なんともまぁ、ぶっ壊れた能力で。」

「仕方ない。厨二病とか言われる思春期特有の考えだから。」

「そうか…」

そりゃこんな馬鹿みたいな能力みたら驚き通り越して呆れるよなぁ。

そして話を聞いていると子供を預かることになった。どうしてこうなった。

第十四話　助けたからって良い事があるわけじゃない（後書き）

駄文だし書きたいことが書けない

１／５追記　全部終わったので更新を早めます

第十五話　迷走する本文（前書き）

書きたいこと詰め込んだらすごいことに。でも短い。

第十五話　迷走する本文

あらすじ
世界の管理者から話を聞いたら子供を預かることに・・・・・なぜだ

「なぜ、管理者の子供を預かるんですか？俺マダ五歳来年小学生。ＯＫ？」

「大丈夫、中身は大人だろう？」

「いや、でも・・・・・」

「四の五の言うな！男なら子供ぐらい育て上げられるだろう。なんだ？動物に欲情でもするのか？」

「それって人としてアウトじゃ・・・あ、俺って化け物じゃん。」

「なら問題ない。」

「問題大有りですって行っちゃたよ。どうしろっていうんだよ…」

小さい狐を置いて親の狐はどこかへ行ってしまったとさ。とかどこの昔話だよ。

「帰るか。」

小さい狐を手にしたまま帰る準備をした。

～帰り道～
ふと公園を見てみる。
泣いている子の周りに色とりどりの髪をした子が囲んでいる。
シュールな光景だ。一人の子を金だとか銀、それに赤、青、黒など
といった人たちが囲むとか。

「俺だったら泣くだろうなぁ。」

そう呟き帰り道の方に歩いていく。
だって知らない奴に囲まれた挙句、話しかけられるとか泣くどころ
かトラウマ物だよ。
そう思い、心の中で合掌した。名も知らない子よ、ご愁傷様。

そして、俺は小学生になった。飛ばしすぎ?そんな事ない。

第十五話　迷走する本文（後書き）

崩壊してます。何もかも。
そして次は原作前の主人公紹介

紹介文　え？これっている？（前書き）

とりあえず原作突入前の馬鹿すぎる能力の数々と主人公紹介

紹介文　え？これっている？

主人公

見た目　黒い髪で一般的　顔は下の上とか中の下など普通の人と変わらない　印象に残りにくい

性格　基本駄目な奴　でも動物や化け物などと呼ばれるものには真面目に対応する

説明　もう二十五回もやっているのに名前が出てこない主人公。原因不明の病で死んだ後に転生する。そのときの顔はとても笑顔だった。なぜなら、助かると思ったから。能力は本当に異常なほどすごい。これも想像力の力のおかげ。本人は痛いことが嫌い。魔力がないから何かで代わりをしようと考えていたら、欲と血で代用できるんじゃね？と思ったらできた。このことはいつか説明予定。

武器

○魔王の太刀

能力　何でも切れる。たとえ空間だろうと結界だろうと魔法だろうと切れる。ただし思い（想い）が弱いと能力もそれに応じて弱くなる。しかし弱くなっても強い。本人が成長すると大きさもいい感じな長さになる。とても軽い。ただし、他の人が使おうとすると拒絶反応で痛みが走る。

○魔王の小太刀

能力　如何なる物からも守る。というよりも太刀と相反するもの。やはりこちらも思い（想い）が弱いと守りが弱くなる。しかし弱くても強い。本人が成長すると大きさもいい感じな長さになる。とても軽い。ただし、他の人が使おうとすると拒絶反応で痛みが走る。

○木刀　暁

能力　御神木から作られた木刀。太刀と小太刀の能力を半分ずつ使えるようなもの。ただし、特殊能力はない。不殺の為にあるが切れ味はすごい。基本これと小太刀で戦う。

希少技能（レアスキル）

○創造力

能力　想像つまり頭で考えたことを現実に出すことが出来る。この能力が基本であり、この能力で武器や他のレアスキルが出来た。デメリットは魔力を使うことだが、血と欲で代用できるようにした。

○魔王の鎧

能力　すべてを反射させる鎧というよりもバリアのほうが近い。範囲は魔力によって変わる。見えないので相手からしたら驚く。見えるようにすると、バリアジャケットのように黒く全身が隠せるようなフード付きコートが出る。

○ロードクラウン

能力　別名　魔王の王冠と呼ばれるもの。強い暗示や催眠効果を持つ。魔力でのみ動くため代用は出来ない。しかし自分自身にかけることは可能。

○瞬間回復・超回復

能力　これさえあれば普通の傷ならすぐに治る。デメリット無し。

技

○意志の剣

能力　簡単に言うと射撃形の魔法。一回で十本しか操作できない。しかし、操作せずにそれぞれの剣の意志で動かせばかなりの量を出せる。代償は魔力か欲。意志というより欲のほうが合っている。

○瞬間回復　対人用

能力　自分以外の人の傷を治す。代償は自分がその傷を負うこと。

紹介文　え？これっている？（後書き）

妄想の垂れ流しって素晴らしい。ちなみに神からの貰った能力は書いてありません

第十六話　原作突入…って俺原作知らねえ　前編（前書き）

時間軸が飛びました。悪いのは俺じゃない！俺の文才が無くしかも書きたいことを書くからいけないんだ！
ただの言い訳です。

第十六話　原作突入…って俺原作知らねえ　前編

あらすじ
とりあえず小学生になった。

小学生になったのは良いが、私立聖祥大学付属小学校って白い制服なんだよな。汚れが目立つからつらいが仕方ない。
とりあえず、オリエアに言われた話と違うところがある。
ひとつ、なぜか全て共学になっている。
ふたつ、中学になると制服が男が黒い制服になる。女子はそのまま。
みっつ、学力が足りないとアウトらしい。

三つ目が一番深刻な問題だ。小、中と大丈夫だが高、大とか内容が分かるわけが無い。前世でも中学三年までしか病院で勉強してないし、私立だから応用とか・・・・まぁ無理な場合は最悪退学かな？
とりあえず現状確認。
小学一、二年と勉強は問題ない。寧ろ今年の三年がきついオリ曰く、運命が決まるとか。
修行は毎回続いている。魔法関連はからっきし駄目だ。使えるのはあの結界だけだ。あの結界も七重が七十に変わったし。
あの管理者の子は元気に育ってます。というか流石に管理者の娘じゃなかった。
魔力保持が俺より上とか・・・・・
それに娘といったが活発に動き回る。そして人の姿にもなる。やはり管理者の娘だった。
でも尻尾はモフモフで気持ちいい。尻尾に悪は無い！
よくてお転婆ということだろう。母はあんなに静かだったのに・・・
家のものを人の姿で壊すのも毎日のことだ。ホントどうしてこうなった。

何？修行の時に連れて行ったのが悪いの？あ・・・涙が・・・

とまぁ長い感傷に浸ってる場合じゃなかった。

学校は地獄だ。それだけはいえる。

化け物と言われるのには慣れたが、こうみんな髪の毛がカラフルなんです。赤から黒まで、クレヨンとか絵の具並みに種類豊富なんですよ。前世だと黒か茶だったし。

とりあえず、弁当を作りバックにいれる。

「んー。なにしてるの？」

おっと、破壊神のお目覚めか

「今失礼なこと考えてなかった？」

怒りマークが見えるくらい怒ってらっしゃる。まだ俺より年下なはずなのに俺ぐらいにしゃべれる。

「どうでもいいから、早く顔洗ってこい。それと、狐状態になっておけ。」

「むー。どうして？こっちの方が楽なのに・・・」

「その姿だと連れて行けないだろ。」

実際、動物持ち込み禁止だがそこは抜かりなし。あいつが自分自身にステルスを掛けるからだ。

実際俺と手合わせしたときに全くと言って良いほど見えなかった。

彼女曰く神通力だそうだ。まぁ魔王の鎧張って待ってれば自滅するんだけどね。

「ほら食べるぞ。」

「いただきます。」

「ちょ、早いって。」

「食べたもん勝ちだもん。」

そういいつつ食べ進めていく。
料理は父が教えてくれたものとレシピ、それに調理器具もある。だから、簡単に作れるのだ。

「ご馳走様。」

そう言い、さっさと歯を磨き制服に着替える。これで四、五着目だろう。全くいじめと言うものはいつになってもきついねぇ。

「さてと行くぞ。」

「まってよぉ。」

「だが断る。」

そういい、ドアを開ける。後ろからタックルを食らうのは毎回のことだから慣れた。いやぁ慣れって怖いよ。

うん。狐状態、俺にステルスは効かなくなっている。そんな何回も見せ付けられたら化け物としての能力で解析できるわけで。

「じゃ、行くか。」

こんな感じで毎日を過ごしている。
変わらない毎日だ。
だが、これが壊れるのを俺は知っている。
いつでも終わりは簡単にくるのだから。

第十六話　原作突入…って俺原作知らねえ　前編（後書き）

からっきしって茨城弁なんですね。知らなかった

第十七話　原作突入…って俺原作知らねえ　後編（前書き）

原作と言っても少し触れるくらいですかね。

第十七話　原作突入…って俺原作知らねえ　後編

徒歩で学校へ向かう。こっちの方がいいし、バスとか乗ると酔うので徒歩が一番だ。

～登校中～

あぁやっぱでかいなぁ、この学校。
流石、私立だと思う。しかも、ところどころ違う。流石パラレルワールドあっさり崩壊してるぜ。

『そんな事考えてる場合じゃないでしょ。早くクラス分け見ないと』

そんなことを念話で伝えてくる。それぐらい分かってるよ。

「えっと…小澤、小澤っと。」

一組だ…マジか。ここって転生者たくさん居るじゃん。というよりも俺とその他の男子全員なんだが…

げ…２９番　高町って書いてあるよ・・・・・
オワタ・・・楽に原作に入らないように今まで別のクラスだったのに・・・・最悪だ。
ほら、みんな可笑しいって。
地面に手を着きｏｒｚになってる人と、何か悟りを開いたような人と、すごい嬉しそうな顔をしてダラッシャーーーーと叫ぶもの。
どうやら、一組に入れたものと入れなかった人の温度差が激しすぎる。
そもそも、何百と言う人がここに来て落ちていったもんなぁ。

初めて小学校受験とか受けたよ。簡単だったが。
とりあえず５～６クラスの一クラス４０～５０と言うとても多い数なのだから、そう落ち込まなくても。

教室に来ると空気がヤバイ。
どれぐらいヤバイかというと空気ピリピリ。全体どよーん。そしてそわそわそつつ、目がギラギラと擬音を使うくらいすごい。
戦争でも始めるのかと言う位の気合の入りようだ。何故そんなに気合が入るのか不思議だと思う。

とりあえず自分の席を探す、一番後ろの窓際だ。一番好きな場所なんだよなぁ

ガララッと音が聞こえた。そこを見ると金、紫、茶色みたいな髪をした三人組が入ってきた。
そして、男子全員そこを見る。それは、ガバッというスピードで。

「はい、それでは自己紹介していきましょう。」

先生がそういう。しかし、これって必要か？と思ってしまう俺は協調性が無いのだろうか。
そんなこと考えていると俺の番に

「小澤有弥です。よろしくおねがいします。」

名前だけ言っていればいいだろう。こういうの苦手なんだよ。

『なんでもっと言わないの？』

『面倒だから』

念話で話しかけるなよ。
そして首絞めるな。息できなくなるだろう。
首に巻きつかせたのは失敗だな。そう思う。

そして今日は無事に過ごせた。平和万歳！

第十七話　原作突入…って俺原作知らねえ　後編（後書き）

やっと名前が出てきた。長かった。
何故この名前か？
苗字はテレビでちらっと見えたから。
名前は外を見たら夕焼けで童謡でゆうやけのゆうやで切れてたからです。
しかし夕焼け関係ない名前という。
そして原作は何一つ残らなくなるという崩壊
やっぱり妄想の垂れ流しだね！

第十八話　ジュエルシードってマジかよ…（前書き）

やっぱり文才欲しい。
そしてまた時間が飛ぶ

第十八話　ジュエルシードってマジかよ…

あらすじ
原作？それって何？

かなりの日にちが過ぎた。
その日はみんな（転生者）はそわそわしていた。
なぜだ？
あるものは気持ち悪いほどの笑顔を浮かべ
あるものはぶつぶつと独り言を言う
あるものはデバイスと思われるものに向かってしゃべりかけている
あるものは関係ないという感じでいつも道理の人。

俺は四番目だと思う。
それと、子狐の名前はそのまま九尾にしました。ネームセンスなんてありませんし。
そして、今日から自由散策させてあげることにした。まぁ学校つまらないと言われるのも面倒だったし。

「みんなは将来どんなおしごとにつきたいですか。」

先生が言った。
将来か。考えるのも面倒だなぁ。今は九尾を育てるのに精一杯だし…やっぱり、サラリーマンかなぁ。
現実的に考えるともっと他のものあると思うが今はこれぐらいだろう。

キーンコーンとお馴染みの鐘がなる。

「きりーつ、れい、ちゃくせーき。」

「ねぇ、高町さん。一緒にお昼ご飯食べない？」

毎回これもお馴染みの光景だ。たしか、聖祥美女だっけ？そんな感じで呼ばれているためにお昼はこのように人が集まってくる。毎回よくもまぁめげずにトライするよなぁ。

そう思いながら屋上のタンク近くに行くため行動する。しかし…

「おい。どこ行こうとしてるんだよ。」

呼び止められた。何だよ、こっちは腹減ってるんだから。

「何だよ。高尾。」

少しいらいらしながら聞く。すると

「お前いつも一人で食べてるよなぁ？俺と一緒に食べないか？」

どの口が言うんだよ。いつもお前いじめていたじゃないか。

今は止まっているが昔はひどかった。

物が隠されたり、物が壊されたり、一番は制服がぼろぼろになったことだよなぁ。

と昔の思い出に浸る。おっと　いけないいけない。返事はもちろん

「ごめん。俺って化け物だから一緒に食えないや。」

逃げた。簡単に言うとどうしていじめていた奴の顔を見ながら飯を食わなきゃ行けないんだよ。

クラスの女子からは非難の目線を感じる。
そりゃ、カッコいいから女子からしたらうらやましいのだろうが、こちらはあいにくと心は狭いので食べれない。

「何だよ・・・・・まぁいつでも相談にのるからな！」

ポイントでも稼いでいるのか？あいつは。ここはゲームでも二次でもないぞ。現実だぞ。
その前にどの口が言うんだよ。ちなみにいじめは気づかないようにされていた。流石に結界の中で殴る、蹴るを受けるとは思わなかった。きついのは肉体ダメージが残ることだったかな？回復を気づかれないようにするのが大変だった。

「あぁ、鬱になる。飯がおいしくなくなるから考えるのやめだ。」

屋上に来る。よし、誰も居ない。これならと跳んでタンクの近くに行く。ホント化け物だよな。

人の声がたくさん聞こえてくる。そりゃ屋上だもの、くるよなぁ。

そんな感じで一日が終わる。
だが今日はこの後、嫌なこと。一部の人は狂喜乱舞するアイテムを九尾は持ってくるのだ。

「で、この青い色した宝石みたいのってもしかしなくても…」

「うん！ジュエルシードだよ。」

馬鹿かこいつ。なんでそんな物騒なものもってくるんだ！

第十八話　ジュエルシードってマジかよ…（後書き）

どうしてこうなった。ほんとにどうしてこうなった。

第十八話　スピードタイプには防戦が一番（前書き）

タイトルは関係ないと思います

第十八話　スピードタイプには防戦が一番

あらすじ
九尾が厄介事を持ち込んできた・・・・あ、胃が痛い

「こら！さっさと元の場所に返してきなさい！」

かなりいらいらしている。泣きそうになっている。一部の人はこれを見て楽しく思うのだろうが俺は思わない。多かれ少なかれ俺が喜ぶと思ったのだろう。

「だ・・・だって・・・これがあれば・・・願いが叶うんだよ？」

神龍でも呼ぶのか？九個も持ってきやがって。

「なぜ九個なんだ？怒らないから説明して？」

「私の尻尾と同じ数だよ・・・」

なんで最後だんまりする。

「でどこから取ってきた？」

「森で３つ、海の浜辺でかもめから２つ、町の公園の砂場で１つ、家の庭に１つ、残りは貰った。」

「誰に貰ったんだよ・・・」

「知らないおじさん。」

「ハイ。アウトーーーーーー！」

知らないおじさんよ。なにやってるんだ。

「でも。話を聞いてくれたらこれあげるって言われたことと、孫に似ているといわれて貰ったよ？」

よかった。何もされてないのか…それなら怒ることも無いかな？

「よかったあ。何かされたのかとか思ったよ。」

「心配してたの？」

「当たり前でしょう。親が子の心配をしない訳が無い。」

実際、奇麗事だがお願いされたので引き受けただけだが…あの人が居ないと転生できなかったわけで…

「えへへ。ありがとう。」

そう言われた。なぜ謝る。そしてなぜ顔を赤らめる。

おかしい。俺は親代わりだが年齢的には変わらないはず…

これがうわさのファザコンと呼ばれるものか！

まずい。このままだとっ、てそれは無いよなぁ。さえない奴に誰が惚れるんだよ。

俺は一生独身を貫くんだ！恋人なんぞいらん！ハーレムもいらん！

いるのは心の癒しだけだ！

強がりを言う。もちろん心の中でだよ。

ジュエルシードは、ビンに詰めときました。
だって触ると危なそうだし…

第十八話　スピードタイプには防戦が一番（後書き）

はいはい崩壊崩壊。
九個とか二十一個あるうちの九個とか…
九尾は主人公が喜ぶと思って持ってきたわけであり、悪意は無い。
どこかの最高神とは大違いですね。

第十九話　防戦しても手数で圧倒されると不利になる（前書き）

またタイトル関係なしという

第十九話　防戦しても手数で圧倒されると不利になる

あらすじ
九尾の善意に泣きそうになりました。

「でこれどうしようか。」

これとはもちろんジュエルシードである。
原作知ってれば対処できたのに、基礎しか教わらなかったからな…
ってそうだよ！最高神のところに行けばいいじゃないか！！

「九尾行くぞ。」

「どこに～。」

「最高神のところだよ。」

「くそっ。なんでいいところでガードするんじゃ！オートガードが憎い！じゃが…見える！見えるぞ！！わしがこやつに勝つところが！！！！」

「ハイどーん。」

そういい、コンセントを引きちぎった。このとき抜いたのでなく引きちぎった。だから・・・・・

「ちょなにするんじゃ。コンセン・ト・・がってぇぇぇぇぇぇぇ。」

こうなる。

「なんでコンセントがッ。返せ！コンセントを返せえええええ。」

「ほい。」

「コタツのコンセントじゃないわ！このゲーム機のコンセントじゃ。」

「じゃあ九尾よろしく。」

「わかったー。」

「って管理者様！ナンデこんなに小さくなって・・・・・まさかお前幼女好「違えよっと。」ああ！本体が・・・・粉々に・・・・もう・・・・わし・・・燃え尽きたよ・・・・・・」

そういい明日のジョー状態になっている。

「もってきたよーってどうしたの？」

「きっと悪い夢でも見たんだよ・・・・・悪い夢をね・・・・・」

「そっかー。でこれどうする？」

「思い切りぶつけてやれ。」

九尾に言うと思い切り最高神にぶつけた。
ゴスッと鈍い音がして倒れた。それはもう推理小説ばりに。
～しばらくお待ちください～
「いたた。で用件は？」
「これどうすればいいと思う？」
「さっさと捨てる。もしくは海へドーンじゃな。」
「よし。お前を海にドーンしてやる。」
「やるー。」
そういい、最高神を持ち海へ連れて行くために地球へ・・・
「分かった。分かったからおろしてくれ。腰が痛いんじゃ。」
「よしおろしてやる。1，2，3」
思い切り床にたたきつけた。ゴキッと言う嫌な音は空耳だろう。
「イタイ。わしの心がイタイ。」
「真面目に答えないのが悪い。」
「スマンのう。でそちらに居るのは隠しgってスミマセンだからその手にある剣下ろしてください。」

「こちらに居るのは管理者の娘だ。名前はシンプルに九尾。」
「は？こうｂってスミマセン刺さってます。先端刺さってるから。痛い。痛い。」
「真面目に聞け。で一時的に預かっている。」
「幼女好きか。知らなかったんじゃが・・・・」
「一回死ぬか？」
「スミマセン。」
とりあえず、話した。何故預かることになったか。ジュエルシードのこと。
「なるほど。命が狙われているから危険にあわせたくないという母としての願いか。」
「そうなりますねぇ。」
「で、ジュエルシードじゃが九個って阿呆か。一日で九個とか。」
「そこが、おかしいんですよねぇ。一日とか、あんた聞いたとき一日ひとつでもきついとか言ってたし。」
「流石、管理者の娘！わしにできない事を平然とやってのけるッ！そこにシビれる！あこがれるゥ！」
「うるさいな。どうするか聞いたんだ。シビれとかあこがれとかい

いから。」

「簡単に言えばどこに渡すかじゃな。１　なのは、２　フェイト、３　アースラ、４　プレシアどれにする？オススメは２か４じゃな。」

「どうせ原作ブレイクしたいだけだろ。１は他の転生者に睨まれるからパス、２も同じ理由、３は確実に捕まる、４は何か怖い、だから俺は５の自分で持ってるを選ぶぜ！」

「馬鹿かお主は！持っていたら逮捕されて３のときより危険じゃよ。それでもいいのか？」

「悪用しなければ大丈夫だって。それにいざとなったらそれを取引材料として逃げるから。」

「じゃあ何でここに来たんじゃよ。来なくてもよかったのに。」

「暇だし、相談してから決めようと思った。それに久しぶりにここに来たかったし。」

「お主・・・・いい奴じゃな。」

「まぁ偶に会いにくるよ。じゃね。ほら九尾帰るぞ。」

「気をつけるんじゃぞ。お主が進む未来は一番きついと思う。頑張るんじゃぞ。」

「分かってるって。オリにもよろしく言っておいてくれよ。」

「うむ。伝えておくよ。」

「ばいばーい。」

「うむ。九尾ちゃんも気をつけての。」

「うん！」

これからの方針は決まった、第四勢力として行こうか。

第十九話　防戦しても手数で圧倒されると不利になる（後書き）

第四勢力と言うのは、１がアースラ組み、２がテスタロッサ組み、３が転生者組みなので４の化け物組みということです。
化け物とか出てくるのだろうか…

第二十話　気づくとそこは知らない所で…（前書き）

これさ書いてるときって年末の大晦日なんだぜ。

第二十話　気づくとそこは知らない所で…

あらすじ
新しい勢力として生きていくんだぜ！

「どうしてこうなった。」

現在俺が居るのは、アースラの中。どうしてこうなったか思い出してみよう・・・・・

あのあと帰ってきたら驚いた。時間の進みが速かったのだ。その時間おおよそ４～５日。
まずい。そう思った時には時すでに遅し。
終わっていたことをあげると
旅館の所。テスタロッサさんとの戦いだっけ？どうなったのだろうか。
町の中での強制発動。
これぐらいが神から聞いた所だろう。
関係なし。興味なし。といえないんだよねぇ。
全く、関係するということはめんどくさい事なのに…

「何故公園で遊んでいたら木が大きくなるんだよ。だれか説明プリーズ。」

と思ったら結界が張られた。まぁ当たり前だろうね。その間に木はじんめんじゅ見たいになってるし、と思ったら後ろに誰かいた。
白い服装に杖を持ったツインテールの人。げ、高町だ。

ステルスで姿を消しつつ隠れる。
杖でじんめんじゅにホームラン予告とか…
そう思っていたら上から金色の魔力弾が飛んできた。
しかしじんめんじゅはガードする。堅いなあれ。というか他の転生者はどうした？普通くるだろう。

「オォォォォォォォォォォォォォ」

叫ぶなじんめんじゅよ。うるさい。
ほら九尾泣きそうじゃんか。泣かしたらここからぶった斬ってやる。
なんかあちらで、オレンジっぽい狼？みたいなのと金髪マントさんが喋ってる。おそらくバリアのことだろう。
ちょ、戦ってるとき他の所見るとか馬鹿なのか？ほらハードプラントみたいの出したじゃないか。
もう、九尾がプルプルふるえて服の一部を強く握ってるよ。可愛いなぁ。

杖ってしゃべるんだ〜知らなかった。それに空を飛ぶとか、魔法ってすげー
ってかなんでお二方はやる気満々なんですか？
なんで斬撃飛ばしてるんですか。それに高町さんどうして杖を構えてるんでしょうか。
ちょっとなんだよアレ！おかしいだろ。レーザーのようなもので出てるって。
ほら泣きそうなんだって、九尾泣くな耐えるんだ。
そしてレーザーによりめり込むじんめんじゅ。見てると可哀想になってきた。
おいおい二人掛りでレーザーとか酷すぎるだろう。
じんめんじゅが光ってるって。

なんだ？進化でもするのかよ。と思っていた時がありました。
出てきたのはジュエルシードですね。
うおっまぶし。
とりあえず、泣かずにすんだな。めでたしめでたしだな。
だが運命はいつでも残酷なんだということだけは言っておこう。
二人がいつの間にかぶつかり合う直前、眩しい閃光と魔方陣からそいつはやってきた。
「ストップだ！」
そう言い、二人の杖を受け止める誰かがでてきた
「ここでの戦闘行動は危険すぎる。」
いや、九尾が泣いたときの方が危険だからね？たぶん俺でも抑えられないよ。
「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか。」
「う・・う・・うぅ・・・・」
やばい泣く、泣いてしまう。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁん」
泣いちゃったよ。まずい。

「誰だ！」

「誰だじゃねえよ！九尾泣かしたのてめえだろうが」

そういうと同時に太刀に思い切り怒りという欲を籠める。

「どこかにきえされぇぇぇ」

そういい思いっきり太刀を振るう。

あの馬鹿はそんな所から何してるんだといわんばかりに動かない。

だが、それが命取りだ。

「「え」」

そう杖を受け止められていた二人が言う。なぜならば・・・・・

そこに居たはずの馬鹿が消えていたからだ。

第二十話　気づくとそこは知らない所で…（後書き）

所々疑問なのはあまり深く知らないからです。
そして次回に続くという。

第二十一話　やったことは仕方ない。その後どうするかが問題だ（前書き）

前回一方的な地の文だったのは見ていたときに次々色々なことが起きたからです。

第二十一話　やったことは仕方ない。その後どうするかが問題だ

あらすじ
九尾を泣かした馬鹿を空間ごと引き裂きどこかに飛ばしました。

「ほらほら泣くなよ。九尾さんお願いしますから。何でも言うこと聞くから。」

何度こういったか。あいつを何処かに飛ばしてからだから数十回は言っているだろう。

その間、二人の魔法使いと一匹の狼？それにフェレットと呼ばれるものは硬直していた。
なぜなら、目の前に居たものが一瞬で消えたからだ。
その頃のアースラ内部でも沈黙と硬直が続いていた…

「泣き止んでくれ。ホントに。何でもするから。」

そのとき、九尾が泣き止んでくれた。しかしニタァという擬音が聞こえてくるような笑みを浮かべて

「じゃあ、一緒に寝て！独りは嫌なの！だから一緒に寝て！」

「それぐらいなら大丈夫だろう。良いよ。」

子煩悩？親馬鹿？可愛い娘のために必死になる事の何が悪い！
でも、見た感じ８歳の子供が４歳程度の子供にヘコヘコするとか・・・

～そのころのアースラ内部～

「急いで彼の行方を捜して。」

とばたばたと忙しなかったという。

～海鳴臨海公園～

「みんな呆けてるうちに帰ろうか。」

「そうだねぇ～。」

すごくにやけながら返答する九尾。やっぱり可愛いなぁ。

「おっと。その前にあの馬鹿回収しないと・・・・・・」

あの馬鹿とは大事な九尾を泣かした奴だ。回収しないと何処か遠くに行っちゃうからな～

～しばらくお待ちください～

よし、何とか見つかった。でもどうしようか…

「ねぇねぇ見て見て～、ジュエルシード～」

「おい馬鹿！持ってくるな持ってくると・・・・ほらぁ！」

金髪マントの奴来たじゃんか！しかも杖が鎌になるとかどうするんだよ。

「それをこちらに渡して。」

「渡さないと・・・・・」

いや、渡さないとどうなるんですか？そして狼喋ってる。あ、九尾も喋るか。

「分かりました。じゃあどう「あげないよ！」うええええええ、ちょ、これ九尾いらないものだから！九個で十分だから、そこにいる子に渡しなさい！。」

「渡しちゃうの？」

泣き目でこちらに聞いてくる。カワユス・・・ってそんな場合じゃないよなぁ。

相手さん殺る気満々だし。腹くくるかねぇ。

「よし、ならば俺のバリア破れたらって話聞けよ。」

「バルディッシュ」

「ｙｅｓ，　ｓｉｒ．」

いやいやイエスでもサーでもないから。

「ちょ何で突撃してくるの？痛い、痛い九尾首絞めるな。」

はっきり言おう。これ破れることって無いんだよな。流石に魔王の名は伊達じゃないと言う。

「光の玉でも持って出直してこいや。」

とりあえず、反射機能はオフになっている。しかしその分硬くなる、広くなるだからなぁ。

「もう諦めろよ。いまならジュエルシード渡すから。家に帰って飯作らないとって話しきけよぉ」

「やっちゃええ。」

あおるな娘よ。そしてさよなら。見知らぬ金髪マントよ。

「何処にでも飛んでいけ。ジュエルシードよ。」

そういい、ジュエルシードをぶん投げる。

危険？九尾が危険な方が俺には耐えられない。

「ということがあったのさ。」

「君は誰に向かっていっているんだ？」

「今の心境を整理してただけだよ。」

現在、アースラ内部にて高町さんとフェレットが人間になったユーノと呼ばれる人と馬鹿と同じ場所にいます。

ユーノさんって九尾と同じかな。動物が人になる、人が動物になる

ができるから。

「なぁ。どうして俺まで行かないといけないんだよ。帰らせてくれよ。ようがあるのは高町さんあけだろう。」

「そういうわけには行かない。艦長の命令だからな。」

そういわれて来たのは艦長の部屋らしい。
部屋を見た感想は、日本を勘違いした外国人と言う所だろうか。
なぜ、盆栽がある。茶釜がある。ししおどしがある。絶対おかしいだろう。九尾そんなそわそわするな。

「おつかれさま。まぁどうぞどうぞ。楽にして。」

そう言われたのでひざの上に九尾を乗せて座る。

そこからの話はよく分からなかった。ジュエルシードを発掘したのがユーノさんで回収しようとしたとか。

「あの、ロストロギアって、何なんですか。」

おい、それを聴くのかよ。まずい、ばれる。
そこから聴いたのはオリエアとあまり変わらないものだった。

「使用法は不明だが使いようによっては世界どころか次元空間さえ滅ぼす力を持つこともある。危険な技術。」

技術と言うより、妄想の産物、空想の産物なんだが・・・・・

「然るべき手続きをもって、然るべき場所に保管されていなければ

いけない品物。」

オリエアてめぇそんなもの持たせたのかよ。

「あなたたちが探しているロストロギア、ジュエルシードは次元干渉型のエネルギーの結晶体。幾つか集めて、特定の方向で起動させれば空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物。」

あ～、そんなものが九個もあるんだ。絶対つかまるだろう。

そこからは話が頭に入ってこなかった。考え事しているから当たり前か。

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「君たちは今回のことを忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい。」

「分かりました。答えはイエス。だから早く返してください。」

「じゃあ君の持っているロストロギア全部置いていってもらおうか。」

「なぜ？」

「危険物だからだ。早く出してもらおう。」

「仕方ないなぁ。ほれ。」

そういい、太刀、小太刀、木刀を馬鹿に向かって投げる。
しかし忘れているのだろうか、俺以外の人が触ると…

「がああああああああ」

こうなる。かなりの痛みらしい。叫びでわかる。
九尾が泣きそうだから取り上げた。

「俺以外の人が触るとこうなるんですよ。だから渡したくなかったのに。」

「それを分かっていて出しのかしら？」

「だって、危険物で保護しないといけないとかさっきの話で言ってたから出したわけで…それで何してるんだ。と申されましても。」

「早く帰ろうよ。」

「九尾まぁまて。三つ回収してからな。」

そういい、三つとも手に持ちいつもの通り腰に掛ける。

「あなたはなんともないのかしら？」

「そんな事知るわけないじゃないですか。そもそもこれが危険物とは知りませんでしたから。」

まぁ、全部嘘だけどな。

「じゃあ帰ります。九尾行くぞ。」

そう言うと思い切り太刀で空間を切り裂き、自分の家まで空間をつなげた。簡易式ワープだ。

「それじゃ、皆さんさようなら。」

そう言い家に帰った。今日の夕飯何にしよう？

第二十一話　やったことは仕方ない。その後どうするかが問題だ（後書き）

長い・・・書きたいこと書いたらこうなった

第二十二話　森と山でのエンカウント率は異常（前書き）

ははははきえたきえたよ。
投稿しようとしたらできませんとか、大晦日にやるのがいけないのか。
あぁ、欝だ

第二十二話　森と山でのエンカウント率は異常

あらすじ
アースラに行きました。え？ジュエルシード？九個ありますよ？
「やっちまった。やっちまったよ。これで立派な犯罪者だ・・・・・・
あはは、笑うしかないよ。」
時空管理局って警察みたいなものだよな…
「元気だして、これあげるからー。」
そういい九尾が出したのは青い色をしたひし形の石で・・・・・っ
てあれ？
「俺ぶん投げたよな・・・それを追って金髪マントと狼から逃げた
わけだし。」
「かんたんだよー。偽物を作ればいいことだからー。」
「語尾伸ばすのやめろ。そして偽物って何だよ？」
「偽物は偽物だよ？世界の管理者の娘にふかのーはない！」
「はいはい、自慢自慢」
でもどうするか。ジュエルシードって二十一個、その中の半分の十
個は俺が持っている…
あ。終わった。金髪マントがもしこのことに気づいたら殺されるし、

アースラ組にもばれたら最悪身柄拘束だろう。

「よし、逃げよう「きゃあ」ってど・・う・・し」

そこから先は言えなかった。なぜなら…

顔が泣きすぎてはれている最高神オリエア、苦笑いのオリ、ビキビキと音が聞こえてきそうなほどお怒りでいらっしゃる九本の尻尾がある年上の女の人が九尾を抱えてこちらを見ている。

「ＯＨＡＮＡＳＩか、天獄に逝くか。どちらがよい？」

「「もちろんＯＨＡＮＡＳＩで！」」

オリエアとハモリりつつ土下座をする。怖くて頭を下げたまま上げられない。

「もう一度言う。ＯＨＡＮＡＳＩという肉体言語と精神ダメージか、『天国に居るのに地獄のような苦しみにもだえる』のどちらがいい？」

「「ＯＨＡＮＡＳＩで」」

天獄とか最初漢字が違うと思ったがそのままの意味だとは…

～ＯＨＡＮＡＳＩ中～

『おいオリエア、生きてるか』

『生きてるが死にそうじゃ』

「そこ！念話で会話するな！」

「読まれたのか！」

「わしより上の管理者じゃよ？心を読むのは簡単じゃろう。」

「おだてても意味ないからな。」

～懲りずにＯＨＡＮＡＳＩ中～

「あぁ、死んだ妻が川の向こうで手を振りながら叫んでる。なに？く・・・る・・・な・・・ってなぜじゃぁぁぁぁ」

「うるさい。」

「オリエア三時間追加」

「そんなぁ。」

～ＯＨＡＮＡＳＩ終了（オリエアあと三時間）～

「何故怒られたんですか？」

「あいつはまた書類ミスをして勝手に転生させたんだ。まったくこの世界にさらにお前と同じ歳の転生者が増えるぞ？だからあんな風に罰を与えるんだ。」

「でも、目の前で無邪気にゲームデータのアイテム消し、その後セーブデータ消去、メモリー粉砕、バックアップ削除、ロムとカセット破壊、続けて本体破壊はきつくないか？」

九尾がきゃっきゃっ言いながら次々オリエアのデータを台無しにしていく。オリは苦笑い。

オリエアは、わしの嫁が・・・嫁が・・・とか言ってるし。あんた妻が居たんじゃないのか？

「俺は何故怒られた？」

「娘を泣かせたでしょう？そして娘を危険な目にあわせたこと。そしてジュエルシードあんなに持ってるって馬鹿なの？」

「全部あなたの娘が持ってきたんですが・・・・・」

九尾は泣き目になりこちらに来る。可愛いなぁ。すごく癒される。

「私だめなこと・・したの？」

「そんな事ないわよ。本当に！」

すごい慌てて誤解を解く。こいつも親馬鹿で子煩悩とか。世界管理できるのか？

「大丈夫よ。世界なんて独自に進んで勝手に滅んでまた進むんだから。それよりきついのは、転生者が増えたせいで私の管理者と言う席を狙ってくる奴が多いのよ。」

「じゃあ最初に出会った時の傷は・・・」

あのときの酷い傷を思い出す。

「そうよ。狙ってきた奴らに不意打ち食らったからね。」

「はぁ、そうですか。じゃあ娘を預けたのも。」

「そうよ。危険な目にあわせたくないため。身勝手なことだと思うけど。」

「親が子を思うことは当たり前だと思いますよ?特殊な場合を除いてですが…」

「おかーさん。もう帰らないといけないの?」

そう九尾が言う。そっかここに来たということは引き取りに・・・・・

「そんな事ないわよ。一緒にいたいのでしょう?だったら娘の願いを聞き入れるのは親として当たり前よ。」

そんなことを言う。恥ずかしい。とても恥ずかしい。

「オリは何で来たの?」

「親父の付き人。そしてひとつの終わりを見届けるために。」

「そうじゃよ。最高神自ら出てきたのじゃからな。」

「終わりって何が終わるんだよ。」

「全ての歪みが一度終わるのよ。それを見届けるために、全世界の管理者の私、イステールと」

「この世界の管理者オリエアと息子のオリが来たというわけじゃ。」

終わりか・・・・色々合ったよなぁ。
転生して、親に会って、楽しく暮らした。
でも親が死んで絶望して憎悪して裏切られた気がしたよなぁ。
それで、九尾と会って、一緒に暮らして、ジュエルシードってアレ？意外に短かったなぁ。

「それを人、死亡フラグと言う。」

「え！死んじゃうの？」

「俺は化け物だから死なないって、久しぶりに化け物っていったなぁ。」

さてと逝きますかね。崩壊したものをゼロに戻すために。

第二十二話　森と山でのエンカウント率は異常（後書き）

毎回タイトル関係ないという。

第二十三話　トラウマ（心的外傷）（前書き）

物語は置いてきた。深く関わるのはいつも最後だけ。
おいしいところ全部持っていくんだ！
そして原作が壊れるのが嫌と言う人は見ないほうがいいでしょう。

第二十三話　トラウマ（心的外傷）

あらすじ
世界の管理者の名前を知り、死亡フラグが立ちました。死なないけどね！

「俺が死ぬのは、化け物じゃなくなったときだ！」

「急に叫んでどうした？」

「頭がいかれたのじゃろう。」

「きっと娘の可愛さに頭をやられたのよ。」

「ハアハアいいながら言われても説得力に欠けるんじゃが。」

いいように言っているのは上から、俺、オリ、オリエア、イステール、オリエアだ。
九尾は寝ている。それよりも…

「何でここで張り込みしてるんだよ・・・」

「ここで名シーンの数々が生まれるんじゃから黙って待ってろ。」

そんなことを言われた。こっちは何も知らないっての。

「ほら、始まるぞ。」

そう言われて見ると高町さん、オレンジっぽい狼、フェレットと公園灯の上に金髪マントがいた。
となりで、
「生なのは、生フェイトハアハア。だが淫獣。てめぇはだめだ。」
といいながら目が血走り、顔は真っ赤になっている。淫獣って誰だろう？
「ひい、ふう、みいって高町さんが五個、金髪マントが九個、俺十個、あれ？足すと二十四とか。」
「簡単じゃよ。九尾が作った物も偽物じゃから三つ偽物があるということじゃろ。」
「三つて多くないか？」
「そんな事ないじゃろ。アルハザード行くには必要だし。」
「アルハザードってなんだよ。」
「忘れられた都市。またの名を管理者のおもちゃ箱。」
「「は？」」
おお、オリとハモッた。
「なんだよ親父。おもちゃ箱って聞いたことないぞ。」

「機会がないからの。ゲームで言うとデバックルーム。色々な能力を管理者が作った能力を保管するんじゃ。ちなみに製作者イステール、わし。管理者イステールじゃよ。」

「親父、後ろに気をつけろよ。」

「なんじゃよ・・・って、アッーーーーーー」

断末魔が聞こえた。合掌。

「イステールさんなんて物創ってるんですか。」

「だって何億って生きて世界を見るのってつまらない物なの。だから創った。後悔してない。」

「そうですか。」

その前にあの戦いすごいよなぁ
魔力弾撃ち合いながらかわしつつ、さらに出すとか。
魔力弾を叩き消すとか。勉強になるよなぁ。オリはうんうん頷いてるし。
でかい魔方陣を金髪マントを描いている。高町さんの周りにも魔方陣が出てくる。

「魔法ってすごいよな。」

「そうだな。だがお前は魔法もどきなら使えるだろう。」

「魔力のない魔法は魔法じゃないと思うけど。」

「だったら、娘と契約すればいいじゃない。魔力供給してもらえるわよ。」
「魔力じゃなくて神通力じゃなかったか？」
「細かいことは気にしないのオリ君。」
「なぁオリ、神ってキャラ簡単に変わるのか？」
「仕事と私事の区別してるんだろう。親父も見習って欲しいよ。」
まだ、オリエアはがんばれ。だとか、負けるな。とか言ってるし、どんだけ好きなんだよ。
「おお、フォトンランサー・ファランクスシフトじゃ！スゴイのう。」
「でも無傷とかおかしいだろう。」
「それはきっとなのはちゃんがすごいからじゃろう。」
そうだ。無傷って事は防御型か？そうしたら攻撃は手数より一撃の方がいいのか？とか思う。
でも、戦闘狂じゃないし、バトルジャンキーでもないからね。
「ここからがオーバーキルなんじゃよなぁ。」
そう呟きが聞こえたので見る。
そこには、桃色のレーザーをバリアで防いでいる金髪マントがいた。

「おお、防ぎきった。」

「まだじゃここからがトラウマにもなる地獄じゃよ。」

高町さんがまた魔力を集めていた。

このとき最高神は後にこういう

「あの桃色の光線に飲まれたらいやじゃのう。非殺傷だから苦しむし。また生で見ると迫力が…」

と他の神に伝えるのであった。

金髪マントが桃色の光線にのみこまれた。

「海がすごいことになっている。これって現実？」

「「現実だろうね。」」

俺の疑問はオリとイステールのよって肯定された。

第二十三話　トラウマ（心的外傷）（後書き）

アルハザードについては見た感じ“神ならいけるって”見たいに崩壊させました。
おもちゃ箱というのは、管理者が適当作った能力の宝庫だから時を操り、死者さえも蘇らせるなんてのは簡単にたくさんあるんです。
原作好きの方スミマセン。

第二十四話　それぞれの考え（前書き）

今回転生者が出てきます。そしてどうしてこうなった。
注意　この作品はフィクションです。現実に実在する物とは一切関係ありません。

第二十四話　それぞれの考え

あらすじ
トラウマって小さい頃にあるとつらいよね！

「くるぞ。」

「何がくるんだって？」

「紫の雷じゃ。」

雲が空で渦巻き、紫色の落雷が金髪マントにぶつかる。ジュエルシードは雲の中に。

「よし行くぞ。」

「「「何処に？」」」

「時の庭園じゃよ。」

そういい俺たちはオリエアによって時の庭園に飛ばされた。

～武装局員（転生者）ｓｉｄｅ～

「俺たち転生者はこの日のために管理局に入った。ますはここをどうにかしよう。目標はドライ言って見ろ。」

「ハッ。アリシアさんに私たち能力で魔力をアリシアさんに注ぎ、復活させることです。」

「よし、じゃあカイル。どう行動するか言って見ろ。」

「ハッ。まずは俺たちの能力でプレシアさんの無力化。プレシアさんを助ける者とアリシアさんを助ける者の二組に別れ、救済してハッピーエンドです。」

「そうだ。俺たちが何故学校に行きつつ管理局員をやっているか、よく考えろ！おい、グロウス」

「ハッ悲しい運命を無くす為にです。そしてみんなで笑うためにです！」

「よく言った。そのために転生し原作を捻じ曲げる！小澤だとか言う奴は邪魔だ。見つけたら始末しろ！」

「「「「「「イエス、ラルフ！」」」」」」

「よし行くぞ！われらテスタロッサ家のために！」

「「「「「「おおおおおおおおおおおお」」」」」」

（まぁお前たちは用済みになったら始末するがな）

ある者は、自らの思いのために・・・・・・

～武装局員（転生者）ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～アースラｓｉｄｅ～

「ビンゴ！尻尾つかんだ！」

「よし。不用意な物質転送が命取りだ。座標を。」

「もう割り出して送ってるよ。」

「武装局員、転送ポートから出動。任務はプレシア・テスタロッサの身柄確保です。」

またある者は任務のために・・・・・・

～アースラｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～プレシアｓｉｄｅ～

玉座に座り吐血する女性が独りジュエルシードに囲まれている

「ゲホッ。ゴホッ。・・・次元魔法はもう体が持たないわ。それに今のでこの場所が捕まれた…。フェイト…あの子じゃだめだわ…」

「そろそろ潮時かもね…」

またある者は自分の願いを叶えるために・・・・・・

～プレシアｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第二十四話　それぞれの考え（後書き）

新しい書き方をしてみました。とても書きにくい・・・・

第二十五話　分からず屋は叩いて治すべし（前書き）

マジ鬱になるわ。投稿したらエラーで消えるし…
年末最後の大晦日投稿なのに・・・
原作崩壊注意！！
さらにいつもより駄文になります。
誰か見てるのかな・・・

第二十五話　分からず屋は叩いて治すべし

あらすじ
それぞれの思惑と考えが時の庭園に集まる。

「でなんで、落ち込んでるんじゃ？」

「だって久しぶりの無双が消えて…」

「どーんまい。」

「ああ。九尾お前だけが心の癒しだよ。」

「くすぐったいよ～。」

敵地に居るのにのんびりしてます。九尾は可愛い！それだけは言える。

「交渉はどうなった？」

「失敗に終わったようじゃの。」

どうやら、アリシアを助けるから、アリシアをよこせということらしいが、管理局員はみんな消えていた。
いや、ちらほら残っている。

何かあそこに居る大魔導師っぽい人がなんか演説をしている。
アリシアって誰だよ。ついでにフェイトも誰だよ。

「歪んだ愛とはこのことを言うんじゃのう。」

造られた命とか。俺も言い方を変えると創られた命だよな。
自分の事も言われているようで気持ち悪い。まぁ被害妄想だし
怒りを通り越して呆れるという。

「失った物の代わりにはならない。」

そりゃ、一回失って最初から創っても外見は一緒でも中身は違う訳
で。

「アリシアはもっと笑ってくれたわ。」

アリシアって誰だよ。あれか、あのポッドの中に居る子か。
金髪マントに似ている気がするが双子か？

「アリシア、アリシアうるさいのう。フェイトちゃんが可哀想だろ
う。」

確かに、アリシアアリシア言ってるな。なに？小さい子好きなの？
だったら保育園だとかに行けばいいのに。

「私はあなたが、大嫌いだったのよ。」

ん？おかしくないか？話を聞いた感じだとアリシアを失ってそれを
元にフェイトを創った。だけども同じじゃなかった？当たり前だろ
う。誰でも成長はするんだ。
記憶が同じでもパラレルワールドのようにＩＦの世界なんてたくさ
んあるんだから同じとは限らないだろう。それに親が子を嫌うって
最初言ってたときと矛盾して・・・・分からなくなった。

「なぁ。あの女の人って悪い人なのか？」

「それぞれの感じ方じゃからな。わしは好きじゃよ。」

いや、悪いか良いかって聞いたんだが。
その前にこいつさっき魔法食らったのは好きだからか。Mだと思ったよ。
まぁ人の数だけ見方があるから仕方ないが、あの人は“可哀想な人”だ。そう思う。
自分の娘が死んだら普通狂うだろう。それが愛しければ愛しいほどに。
その狂ったときに間違い続けただけだ。
だからあの人にはこれから幸せになってもらいたい。
これは自分のエゴで自分勝手な事だ。誰からなんと言われようとも助けよう。
九尾の前ではカッコいいところ見せたいしな。

『ほッほーい。私イステール。今ロボットと戦ってるの』

『イステールさん。喋ってないで倒して』

『ぶー。こっちはあなたより上よ？こんなの一撃でつぶせるわよ』

と言われ切られた。何がしたかったのか。分からない。

「ここ崩壊してないか。」

「当たり前じゃ。ここからクライマックスじゃ。好きに行動しろ。わしは咎めない。」

「よし、じゃあ九尾を守ろう。」
九尾第一だからな。これは仕方ない。
「私たちは旅立つの…」
そう言うとジュエルシードが出てくる。あれ？九個？
「九尾もしかして…」
「これ？」
出したのは残りのジュエルシードだがほかのより色が黒い。
「偽物だから回収したの。」
だがひとつだけ黒くなっていない物がある。
「ひとつだけ本物持ってたの。オリジナルがないとコピーできないから。」
じゃあ、俺十二個＋偽物三個、あの人が九個か。
「だがジュエルシードが熱いんだが。」
「共鳴でもしてるんじゃないか？」
ばっさりと捨てられた

「失われた都。アルハザードへ。」
アルハザード？おもちゃ箱の事か。
確かにそこに行けば助けられる気がしなくもないが…
「取り戻すのよ。全てを！」
ジュエルシードが光り輝く。
「これはいかんなぁ。」
「もしかして次元震かよ。」
「もしかしなくてもそうじゃ。でも虚数空間には気をつけるんじゃよ。魔法が消去されるからの。」
「俺魔法使えないし。レアスキルも無効化されるのか？」
「重力の続く限り落ちるからレアスキルどころでないと思うぞ。」
「創造力なめるなよ。その前に化け物だから大丈夫だ。ピンチなら空間切り裂いて他から出てくるから。」
「そうか。じゃが気をつけろよ。」
「おう。じゃあな。」
「私も行くー」

「九尾は危ないから留守番だ。」

「嫌だ。一緒に居る。」

「あまり見せ付けられても困るし、泣かれたらわしが困る。さっさと連れて行け。」

何を見せ付けるんだ？子が親と離れたくないのが普通じゃないか？

「とりあえず好きなように行動するわ。」

そう伝えて、馬鹿笑いしている人のところに行く。

「ははあはははははあはははははあはは」

「ははははあはははあっはあはははははあは」

「誰！」

「おお怖い怖い。」

「茶化さないで。いつからそこに？」

「えーっと局員突入から？」

『何であなたがそこに居るんですか！民間人はそこから離れて。』

「えっと。リンディさんでしたっけ？ここに居るのは自分のエゴですよ。」

『エゴでも何でもいいから早く離れなさい』

「これを見てもですか？」

そう言いジュエルシードを見せる。ちゃんと十二個あるよな。

『何でそんなに持ってるの』

「そうよ、それをよこしなさい。」

紫色の雷が飛んでくる。しかし…

「こんなんで倒せると思った？馬鹿だねぇ。もっとよく見ようぜ。」

そういい全部反射させる。

「がああああああ」

「どう？自分で自分の攻撃受けるって？どんな気持ちかなぁ？」

『なんでバリアジャケットも無いのに…』

血を吐くほどつらいはずなのに…魔方陣展開するとは流石にまずいかな。

「フォトンランサー・ファランクスシフト」

これってタメ無かったか？流石に大魔道師だなぁ。

まぁ直撃なんてしないけど。

「ここからは、本気で行かせて貰いますよ？早くしないと馬鹿が来てしまうんでね。」

そう言い、詠唱を開始する。

「我、転生せし者なり、この手にある剣は全てを絶つもの。この手にある剣は全てを護るもの。」

そういい、右手に魔王の太刀を左手には魔王の小太刀を持つ。

「矛盾すら超える力。今ここにあり。」

さらに、いつもは飾りの王冠が黒く染まり頭に載る。

「我、自分の信念のために力を振るう。」

そして、黒い全身を隠せるコートに身を包む。

「さぁ、化け物の狩りを始めよう。」

そういい、太刀を大魔道師に向ける。

自分のことすら分からない奴を叩くとしますか。

第二十五話　分からず屋は叩いて治すべし（後書き）

転生者は作戦失敗になりましたが数人残っています。
自分でだんだん分からなくなると言う。
そしてエラーで４回書き直すという。
最初何かいてたんだっけ？

第二十六話　助けたからって良い事があるわけじゃないって一回言わなかったっ

ここから原作崩壊だぜ！

第二十六話　助けたからって良い事があるわけじゃないって一回言わなかったのに…

あらすじ
何回も消えたので前回の内容が変わり、泣きました。今年最後なの
に…

「待っててあげたのだからがっかりさせないでよ。」

「バトルジャンキーですか。」

「そんな事無いと思うわよ。」

「ですよねー。」

でもまぁ、これで一形態だからなぁ。魔王の名は伊達でないと

「フォトンランサー。」

紫色の魔力弾と言うより雷だな。ありゃあ

『捻じ曲がれ』

そう命令するとあら不思議！全部捩れて他のところに！

「何かしらその能力は？」

「鶴の一声ならぬ、有無を言わさぬ魔王の一声…いや、命令です。」

だいたい魔力なしで使えると思ったら足元から真っ黒な魔力光がでてるんだよ。俺の心が黒いからか？

「九尾ここは危ないから・・・ってうお。向こう行きなさい。」

「嫌だ。」

ですよねー。仕方ない我侭を聞くのも親の務めだ。

「じゃあ狐の姿になってコートの中に入りなさい。」

とりあえずは大丈夫だろう。

「ちょこまかと・・・・これならどうかしら？」

バインドかよ。まぁこのまま続けると馬鹿がくるからさっさとやりますかね。

「よっと。」

バインドを思い切り引きちぎる。魔力でバインドブレイクなんてやったことないし

「さっさと終わらせるぞ。九尾の教育に悪いからな。」

だからと言って血が吹き出ることは無い。非殺傷性だから・・・多分

「カッコいい技名が欲しかった！だが断る！全てを切り裂け！」

そう言い攻撃することだけに集中する。護りは捨てよう。

「ってか血が出てる！非殺傷性じゃないのかよ。」

おそらく護りを薄くしたため食らったのだろう。バリアジャケットじゃないからな。

「目の前にある空間ごと引き裂き尽くす！一撃断絶！エリアルブレイク！」

そういい太刀を振る。というかいつもと同じだが…違うところをあげると空間は切れるが空気の部分のみ切るため鋭さは増しているはず。なんで説明的か？作者が戦闘描写嫌いなんだよ」

「何ぶつぶつ喋ってるの？」

おっと口に出ていたようだ。

「大魔道師さん大丈夫ですか…って死んでる。」

「殺しちゃったの？」

「冗談だ。脈は弱いが衰弱しているから。」

「よかったね。」

「あぁ。とりあえず治すか。って「ゴオッ」。」

へんな音が聞こえて口から血と言うよりも真っ赤な液体だな。こんなので戦ってたのかよ。

後ろの瓦礫から青白い光が出てきて

「世界はいつだってこんなはずじゃないことばっかりだよ。」

と申された。何が？

「いつだって誰だってそうなんだ。」

誰に向かって行ってるの？何これ。俺って空気？中学のとき空気だったけどこれは酷い

「こんなはずじゃない現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは、個人の自由だ！」

確かにそうだけど。そうだけども！！

『今まで念話で話していたようじゃよ』

知るかよ。

「だけど、自分の勝手な悲しみに、無関係な人間を巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない！！」

そういわれると大魔ど『プレシアさんじゃ』プレシアさんが血を吐きながら立ち上がる。まだ治ってないのに。

「母さん。」

後ろから不意に聞こえた。そこには金髪マントがいた。

「来るんじゃない。」

そう冷たく言う。馬鹿だねぇ。素直に受け入れればいいのに。
人形だから違うじゃなくて、あんたが経緯はともかく造ったんだから
らあんたの娘だろうに。

「消えなさい。もうあなたに用は無い。」

しかし・・・

「俺たちは用があるんだよ。」

そう言い放ったのは、転生者と思われるもの達

「俺達がアルハザードに行かなくてもアリシアさんを蘇生させる。」

「死者をよみがえらせることなんてできるわけが無い！」

おお、馬鹿がいい事言ったぞ。

「俺達は神に選ばれたその証拠に…ほら。」

そういい投げられたのは、まさか・・・嘘・・・だろ

「このように管理者だって殺せる。」

俺は急いでイステールに近寄り傷を治す

「ゲフッ、ゴホッ」

デメリットで血がとめどなく全身から出てくる。気づけばコートが黒いのに赤く見えたり、足元が血の池になっていた。それに九尾まで人になり泣きそうになっている。

「どうだ？俺達に任せろってんだ。」

アイツハナニヲイッテイルンダ

「よし行くぞお前ら！ハッピーエンドに向かうぞ！」

ナニガハッピーエンドダ・・・カンケイナイモノマデマキコンデ・・・

何故こうなったか。少し時間を戻してみよう

～転生者ｓｉｄｅ～

途中、世界の管理者に出会ったから、捕まえた。

「なぁ。お前は強いものだ。だから俺の使い魔にならないか？」

「死んでもお断りよ。」

そういわれた。だから俺はハイと言うまで殴る、蹴るを繰り返す。他の奴らも加わる。しかし反抗的な目つきがアイツと重なる。

「おいもう死んでる。だからこいつは小澤をひきつけるために使おう。」

さっきモニタを展開したら小澤と思われるものがいた。

アイツは動物好きだからこれを囮にすれば簡単に俺の計画がうまくいくだろう。

この後のことはうまくいったはずだった。
小澤は案の定、囮に向かっていった。そのとき名前を言っていたが知らない。
俺は原作キャラさえいればいいんだ。だから次はリインフォースも救う。
そのために俺に歯向かう奴は潰してきた。小澤以外…
だがそのときおかしなことに気づいた。
アリシアに魔力を注ぎ込んでいるのだが全く目覚めない。
それどころか魔力を奪い取られている気がする。

そのときだった。
ポッドの中にいるはずのアリシアが目の前にいたのは…

気がつくとそこは、アースラの医務室だった。
何があったんだろうか

～転生者ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第二十六話　助けたからって良い事があるわけじゃないって一回言わなかったっ

魔法は勝手な創造です。
エリアルって空気の精だよね？

第二十七話　壊れた歯車　壊れた心（前書き）

歯車は抑制や抑えると言う意味で使ってます。
そしてどうしてこうなった。
注意　作者が書ける精一杯のグロです。先に行くときは注意してください。

第二十七話　壊れた歯車　壊れた心

あらすじ
モウナニガナンダカワカラナイヨ・・・・・

「きゃはははははははははははは」
無邪気な声が聞こえる。しかし俺は振り返らない。
「ドウシテ？ナンデナオラナインダ？」
すごくつらい。体がちぎれる。熱い鉄の棒で殴られて火傷するように痛い。
でも、イステールはもっと痛いはずなんだ。
「どーしたの？お兄ちゃん？アリシアと一緒に遊ぼうよ。」
「九尾、ここから逃げろ。反抗するなよ、俺を殺したくなかったら。」
「わ・・・分かった。」
脅しが効いたのかやけに素直に逃げていく
「何逃げようとしているの？」
そういい九尾に手が迫るが俺が払いのける。

「あははっ。お兄ちゃんが遊んでくれるの？アリシア嬉しい！」
いてえ。払いのけただけなのに腕がポッキリ逝ったよ。
「あぁ。俺が遊んでやるよ。いつまでもな。」
『プレシアさんでしたっけ』
『ええそうよ』
『だったらみんな連れてここから離れてください』
『駄目よ。アリシアを置いていけないし、ここは次元震で崩れるのよ』
『そんなの知ってますよ。だから唯一人じゃない俺が残るんです』
「お兄ちゃんまだ～。アリシアつまんないな～。」
『っ。速く行ってください』
思いっきり胸に手を突っ込まれた。
「これがお兄ちゃんの心臓か～動いてるね。」
「そんな可愛い顔で怖い事言うなよ。」
今の状況は心臓を手で鷲掴みにされている。

「これを握りつぶしたらどうなるかなぁ～」
「やって見ればいいだろう。」
「それもそうだね。」
ブチッと嫌な音がする。音は自分の中からだ。
「あはは、おかしいなぁ。ドウシテ生きてるの？」
「化け物だから心臓をつぶされても生きてられるのさ。」
実際、死なないだけで痛いものは痛い。気が遠くなりそうだが仕方ない。
「ほんとに死なないか試してみようか。アリシアのおもちゃになってね♪大丈夫。壊れるまで使ってあげるから。」
そういわれると頭に思い切り瓦礫を叩き付けられた。
イテェ、だが小さい子に手を出さないのが紳士であり、親というものだ。
「ほんとに死なないね。脈なんてもうないのに。」
脈が無いとか生物的に死んでいるのでは。
「これならアリシアのおもちゃとしてずっと一緒に生きていけるよ。良かったね。」
よかった。ねぇ。俺的には心臓つぶされ、頭に瓦礫を叩きつけられ

たりを永遠にされるのは嫌だ。
だから・・・・・

「どうしたの？」

アリシアに抱きつく。一部の方からはごほうびです。とか言いそうだが心臓つぶされて同じ事いえるか？

「なんで抱きつくの？」

「可愛いものを愛でるのの何が悪い。可愛いものは可愛いんだから。」

こんなセリフを言うとか…九尾にばれたらずっと口利いてくれなくなりそうだ。

「どうして泣いてるの？」

「ん？簡単だよ。涙と言うのは血なんだよ？全身出血だよ。」

「よくわから・・・な・・い・・・や」

そういい眠りに着く。
寝顔が可愛い。だから許す。
心臓つぶされて許すことって狂ってるのかな？
まぁいいや。人として狂ってるし。じゃなかったら化け物じゃないよな・・・・・

普通、こういう場合は助けるのが普通だろう。それが母の願いなんだから。

プレシアさんは娘を愛した。だから失った時の悲しみが大きかった。
何故死んでしまったのか分からないが子のことを思うのが母だ。
それが病的なほど一方的でも・・・・・
だから俺はこの子を救おう。
それがここから居なくなった、みんなの願いなのだから。

第二十七話　壊れた歯車　壊れた心（後書き）

これを書いてるときに年を越した…

何やってるんだよ…

第二十八話　失われた歯車　失くした心（前書き）

はい。実際これが年越し初めての前書きと本文です。
あとがき?前回年越しにかいたよ
アースラと言うより主人公以外の目線ですね

注意　気分が悪くなるほどご都合主義です。

第二十八話　失われた歯車　失くした心

あらすじ
前回の脱出した後の話とアリシアの話です。

～プレシアｓｉｄｅ～

『っ。速く行ってください』

そう聞こえたときにはもう彼は胸に腕を貫かれていた。
しかし、彼は『そんなの知ってますよ。だから唯一人じゃない俺が残るんです』と言った。
たしかに彼は人じゃないといった。
しかし任せて大丈夫なのだろうか。彼は強がっているだけでは？
考えるだけ無駄だろう。なぜなら彼は・・・・・・

～プレシアｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～オリエアｓｉｄｅ～

浅はかな考えの転生者どもが魔力を流して暴走させおった。
もともと、仮死状態に近いのにあんな膨大な魔力を送るとは・・・・・
空気の入った風船にさらに空気を入れることと同じじゃよ。
他には、水のたくさん入った器に水をさらに入れる。

簡単に言うと器に入る許容値を大幅にオーバーしているから暴走するんじゃ。
全くここに残るとか奴はいっておるし・・・・・
仕方ない。ここは奴に任せておこうかの。なぜなら奴は・・・・・・

～オリエアｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～九尾ｓｉｄｅ～

「九尾、ここから逃げろ。反抗するなよ、俺を殺したくなかったら。」

と言われた。いつもなら“反抗するなよ”なんていわない。いつも私の我侭を聞いてくれるからだ。
それなのに“俺を殺したくなかったら”なんていわれたらそこから逃げるしかない。
たしかにあの娘は怖い感じがした。でも殺される位のことじゃない。無邪気なだけだ。そう思った。
でも・・・胸に手が突き刺さっている。光景を見てから考えが変わった。
あの子からは殺気は感じないなぜなら、無邪気な殺気だからだ。
小さい子が理由も分からず蟻をつぶすのと一緒だ。
だから殺気を感じなかったのだ。その考えは正しいと思う。
でも・・・・・彼なら大丈夫だろう。なぜなら・・・・・

～九尾ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～オリｓｉｄｅ～

俺は目を疑った。そこには胸を貫かれる彼の姿があったからだ。
彼はいつも、鎧を張っている。だが、子供と遊ぶときや学校に行くときははずしている。
それが今回仇となったのだろう。
確かに彼は昔、心臓を貫かれても生きていた。しかしアレとこれは全く持って別物だ。
かの有名な瞬間回復でも体に気がないと回復ができない。
しかし彼には気も魔力も無い。あるのは血と欲といっていた。
だから全身に血を送るためのポンプをつぶされたとしたら彼は死ぬだろう。
しかし・・まぁ大丈夫だろう。なぜならば・・・・・

～オリｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～イステールｓｉｄｅ～

いたた。ここは何処だろうか。
たしか、ロボットみたいな物と戦ってハッスルしすぎたからいとしの娘、九尾に会いに行こうとしたときだった。転生者が俺のものになれと言ってきた。だから頑なに拒んだはず。それで私は死んだはず。

でも生きている。でも何かがおかしかった。
プレシアさんは何処か無理してそうな顔をしてる。
オリエアは何処か悔しそうに。
オリは苛立ちを隠してすました顔をしていた。
娘なんか、泣きそうなのを堪えている。
なぜだろう。そこで私は気づいてしまった。
彼が居ないのだ。だから娘は泣きそうで、オリは苛立ち、オリエアは悔しそうに、プレシアさんも無理しているように見えるのだ。
でも彼ならいつでも戻ってきそうだ。なぜなら・・・・・

～イステールｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～アリシアｓｉｄｅ～

私を起こしてくれたおにいちゃん達はみんな倒れちゃった。
でも、目の前にいるお兄ちゃんは違う！直感でそう感じた。
だから私は試した。
逃がそうとしている動物めがけて手を伸ばした。でもそれはとめられた。
腕が折れて痛いはずなのに・・・だから私は嬉しかった。構ってもらえる。
私はずっと独りだった。暗い、暗い場所でただ独り・・・・・
だから、目の前にいた人たちから来ているものを必死に捕ろうとした。
でも捕ったらみんな倒れちゃった。悲しかった。また独りなの？って
だから目の前に居るお兄ちゃんが嬉しかった。
私に構ってくれる。心臓を鷲掴みにしても恐れないで居てくれる。

それだけで嬉しかった。
だからおもちゃなどと言ってしまったのだ。彼は物じゃないのに。
だけど私を可愛いと言ってくれた！可哀想じゃなくて可愛いって。
だから抱きしめられても嫌な感じはしなかった。でも眠くなってきた。
だから寝よう。彼ならきっと私を助けてくれる。なぜならば・・・・・

～アリシアｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

第二十八話　失われた歯車　失くした心（後書き）

なぜならばの後に続く言葉は・・・・・・
ご想像にお任せします。
タイトルはいつも道理関係ない

第二十九話　愛するだとか愛されるだとかｌｉｋｅだったりｌｏｖｅだったり

タイトルはいつも関係ない！関係ある日はくるのだろうか・・・・・・

そして毎回の注意　原作崩壊中

原作関係ないほうが書きやすいとか。

第二十九話　愛するだとか愛されるだとかｌｉｋｅだったりｌｏｖｅだったり

あらすじ
色々な人の心境を確認しました。え？なのは？フェイト？グロテスクな物見たので寝込んでます。

目が覚めると目の前には金髪の女の子が裸で・・・・・・え？

「ナンデ裸？説明求ム。」

「昨日あんなに激しかったのに忘れたの？」

はい？昨日？昨日何してたっけ？そもそもここ何処だ？城か・・・・・・ゑ？お城？まずいぞ。前世ですらコンナトコ御伽噺か雲の上の存在だったのに・・・・・・城・・・だよなぁ。

「スイマセンっしたー。」

ジャンプしながら土下座する。このベットのスプリングぱねぇ。飛べる！今なら目の前の子が

「てめぇ。昨日のこと忘れただって？あぁんなめてんのか？そこから飛び降りろよ。」

といわれ、バイオレンスな状況にも対応できそうだ。

「でもすごいね。昨日の傷がもう無くなってる。脈も戻ってるし、心音も聞こえる…」

ペタペタ触られた挙句、脈を図られ、胸に耳を当てられている。一部の方は幼女ぺろぺろだとかようじょはあはあ言いそうだ。俺？俺は今は九尾を育てるのに精一杯だからなぁ。その前に俺は真摯だ。真摯な紳士なんだ。

「でもドウシテ心臓を潰したのに元に戻ってるの？」

ｗｈｙ？心臓を潰す？ＨＡ・ＨＡ・ＨＡ何言ってるんだ。この通りぴんぴんしている訳で・・・・・

えーとあそこにある血の池は何でしょう。黒ずんだカーペットがある。

「む、これは触ると独特の粘り、まさか・・・ペロッ　これは・・・血だ。」

だが誰の血だろうか・・・・・俺は傷が無いわけで・・・あっ。

ｏｒｚヤッちまったのか。

「あの血は誰の血でございましょうか。」

「うん～。誰だろう。」

よし！これで、ヤっちまったフラグは終わった。

「そんなことより遊ぼうよ。」

「よし。何して遊ぶか？」

「新婚ごっこ。」

おおう、いまの子供は昼ドラ好きなのか・・・俺は前世の三角関係のどろどろがすきだったよなぁ・・・男がどうやって危機を回避するのかとか…

だが断るわけには行かない。紳士だからな。それにここに居れば九尾とかが来てくれるだろう

「じゃあ、はじめるよ。」

始まったのはいいがとても重い。何がって？この役だよ。なんでも

「あなたは、好きな子がいるけども、その子が届かない場所にいて、目の前の子だけを愛する役ね。」

重い。とても重い。しかも役に入りきってるのか、

「ごめん。今度からこんなことが無いようにするから。」

「こんなことって何？ドウシテ私以外の子を見ているの・・・・オカシイよ。あなたには私しかいない。私もあなたしかいない。だから私だけを見ていればいいの。他の女に目移りしないで・・・・・・・もし今度目移りしたら何するか分からないかも・・・・・アハッ♪それにまだあの子の子と引きずってるの？あの子はあなたを捨てて逃げたのよ？でも私は違う。あなたが死ねといえば死ぬし。殺して来いといえば殺してくる。だから私だけを見て。私だけをアイシテ。」

怖い。怖い。これが恐怖と言うものか。イステールよりも・・・「ズダンッ」あばばばば

「いま他の子の子と考えていたでしょ？そんな子にはお仕置きシナイト。」

ガクガクブルブル。顔文字なら（（（；゜Д゜））））だろう。

「どうしてそんなにおびえるの？私はワルクナイ。ワルイノハアナタナンダカラ。」

目が！目が単色に！はじめてみたよ超怖ぇぇぇぇぇぇぇぇぇ

「マズハドコヲキリオトソウカシラ？ミミ？ユビ・ソレトモ・・・・・」

生命の危機だ！緊急事態、いや緊急死体だ。

「ジャアコノミミヲ「はいどーーーーん。」きゅー。」

誰か助けてくれたようだ。

「ありがとうご・・ざ・・まs」

最後までいえなかった。だって九尾の後ろに阿修羅が見えるから。

「アッーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」

そう叫び意識を手放した。

第二十九話　愛するだとか愛されるだとかｌｉｋｅだったりｌｏｖｅだったり

ドウシテこうなった。ドウシテこうなった。

大切なことだから二度（ｒｙ

第三十話　死人と四人（前書き）

深夜ってテンション上がるよね

第三十話　死人と四人

あらすじ
助かった・・・・いや助からなかったか。

「どうしてこうなった。」

俺は今、囲まれている。
一人目イステール　後ろに鬼が見える
二人目リンディさん　後ろに般若が見える
三人目プレシアさん　後ろに死神が見える
四人目九尾様　後ろに阿修羅が見える。いや鬼神か

「「「「今失礼なこと考えてなかった？」」」」

「滅相もない」

はやく抜け出したい。空気が重い。無機質な部屋ほど怖いものは無い。

「じゃあ。私から」

鬼の登場か

「何であなたはあの時大丈夫だと思ったのかしら。」

「化け物だから？」

「化け物でも死ぬときは死ぬでしょう。」

「じゃあ一回死んでますね。＜居眠りでの事故！！トラック激突で一家死亡＞って見出しの新聞があったはずですよ？」

「リンディさんありますか？」

「ありますよ。これですね。」

「じゃあ私ね。」

般若か。

「何故ジュエルシードをあんなにもってたのかしら？言ってくれれば回収したのに。」

「九尾が持ってきた。それにあの時は早く帰りたかった。以上。」

「次は私ね。」

死神か

「アリシアを助けてくれてありがとう。」

「いえいえ、子供を助けるのは親の役目ですから。」

「え・・・子供がいるの？」

「いえ。いませんけど。」

「じゃあ何故。」
「とりあえず母は忙しいから預かってるだけですよ。」
「そう・・・」
「じゃあ私。」
最後は鬼神か
「あの子とはなにかあったのか・し・ら」
「痛い。痛い。何もないと信じたい。」
その瞬間、空気が固まった。
「ふ～ん何かしちゃったんだ～。」
「してないって、したのは新婚ごっこだ。」
さらに凍りついた。
「私のアリシアに何してるのよぉ」
「あばばばばば。」
雷がなぜかガードできない。反射よ、仕事してくれ。
「プレシアさんはフェイトさんって言う人と仲直りできたんですか？」

「とりあえずは・・・・・あの子が私を母だと思ってくれるのなら。」

「そうですか。」

それは何よりだ。よく分からんけど。

「でも、これってハッピーエンドですかね？」

「そうでもないでしょう。私とテスタロッサ家は裁判がありますので。」

「リンディさんや、裁判とはなんぞね。」

「今回のジュエルシード及びプレシアさんの罪に対しての裁判です。」

「ジュエルシードは俺が全部持ってるけどいいのかい？」

「普通は封印されるのですが…まぁいいでしょうね。」

「適当ですね。」

「えぇ。」

第三十話　死人と四人（後書き）

ファンを敵に回す？
これは俺の妄想と言うかテンションで書いているんだ！
妄想４０％　空想３０％　テンション３０％だし

第三十一話　優しさも気づかなければただのお節介（前書き）

優しいってなんだろうか
原作崩壊中なので注意です。

第三十一話　優しさも気づかなければただのお節介

あらすじ
色々と聞かれた事に答えました。
質問が終わったから出てきたが、ここ何処だ？
迷子ですね。
うろうろしているとオリを見つけた。

「なぁ。」

「なんだ？」

「オリってさ。あの時何処居たのさ。」

「あの時とは？」

「突入した後のことだよ。」

「あぁ、イステールさんと一緒にいたぞ。」

「まさか・・・・これ（そう言い小指を出し）でこれ（親指を人差し指と中指ではさむ）ですか。」

「そんな訳あるか。」

思い切り頭を叩かれる。ベシッじゃなくてゴスッだよ。

「ぐおおおおおおお」

「もしそうなったら、九尾はお前と離れるぞ。」

「なん・・・だと・・・・」

嫌だ。それは嫌だ。心のオアシスを無くすとか・・・・・

「なぁ嘘だろ。嘘と言ってくれ。いや、嘘だッ」

「イステールさんといたのは、あの人が「面白そうな臭いするっ」って言ったから、親父が「ついていけ」って言ったからだよ。」

やべえ。オリの裏声とか・・・・・　腹筋が捩れる。

「何笑ってるんだよ。」

今度はゴスッじゃなくてベキッだよ・・・・・

「まあ、何も無いから安心しろ。」

手を振りどこかに行ってしまう。

あ、道聞いてない。

とりあえずうろうろしてみる。

「あ。お兄ちゃんだ！」

ギ・ギ・ギという感じで振り向くと、なぜかそこにはアリシアが二人いた。
いや。片方は姉か？
「えへへへへ」
笑いながら近づいてくる。ホラーゲームなら捕まったらスタートに戻るだろう。だが今は違う！
「そこのアリシアのお姉さん！助けてください！」
そう叫んだ。いや、叫んだのが悪かった。
「どうしてアリシアがいるのに他の人をよぶのかなぁ～」
「ヒッ！」
瞬間的に俺は駆け出した。心の中は恐怖でいっぱいだ。
「ドウシテ逃げるの？」
速い。全速なのに追いつかれそうだ。
「わかった！鬼ごっこだね！」
いえ。むしろあなたは鬼より怖いです。
「いやあああああああああ」

叫んだ。怖いときほど声が出ないはずなのに・・・・・・

結果は逃げきった。局員の人が駆けつけてくれたからだ。叫んでよかった。

「君は本当にあのときの子どもかい？」

「はい。そうですけど・・・」

何回きかれるんだ？もう十回は聞いたぞ？

「あ、クロノ執務官」

はいってきたのは馬鹿だ。

「よう。馬鹿。」

「誰が馬鹿だ！」

「九尾泣かした。だから馬鹿。アーユーオケィ？」

「ＯＫじゃないぞ。」

「で何で来たんだい？」

「質問に答えてもらうためさ。」

そう言うとモニタが出てくる。魔法って便利だなぁ

出てきたのはちょうどプレシアさんと馬鹿笑いしているときだ。

「ここからだ。」

『「こんなんで倒せると思った？馬鹿だねぇ。もっとよく見ようぜ。」』

そうモニタから聞こえた。めっちゃ恥ずかしい。

「これは何だ？」

「ん？ただ全部反射しただけだが？」

「そういう事じゃない。なぜ反射してるんだ。」

「レアスキルだったけなぁ。」

「レアスキル持ちなのか？」

「たぶん・・・・・」

「どうしてこんなにレアスキル持ちがいるんだ・・・・・って他はこれだ。

『「我、転生せし者なり。この手にある剣は全てを絶つもの。この手にある剣は全てを護るもの。」

「矛盾すら超える力。今ここにあり。」「我、自分の信念のために力を振るう。」「さぁ、化け物の狩りを始めよう。」』

恥ずかしい。流石にテンションで詠唱したが無くてもいいんだよなぁ。

「ここの転生せし者ってなんだ？」

「さぁ？」

はぐらかす。それしかないだろう。

「次はこの化け物と言う部分だが・・・・・」

「死ぬはずの事故で死ななかった。だから人じゃなくて化け物。」

「そうか・・・」

やけにあっさりだな？

「ではここは？」

腕が折れてるのが分かる。それに胸に手が刺さってる。

「最近のＣＧってすごいですね。」

「ＣＧじゃない。本物だ。」

「この事は記憶にございませんが・・・・・」

「そうか・・・ならもういい。」

そう言い出て行く。何がしたかったのか。

第三十一話　優しさも気づかなければただのお節介（後書き）

クロノが映像を見せたのは優しさです。

第三十二話　出会いがあるから別れがある。でも・・・（前書き）

出会いがあるから別れがある。
だがもし出会わなければ・・・もし別れなかったら・・・
そんな事。たったそれだけのことでも未来は変わる。
だが本文には関係ない。それが俺。
そして原作崩壊中なので注意です。

第三十二話　出会いがあるから別れがある。でも・・・

あらすじ
最近のＣＧはすごい

「何故に牢屋にアリシアに似ている人と耳がついている人と居る。誰か説明求ム。」

「「・・・・・・・」」

おおう。めっさ無視。悲しすぎる。あれ目からろ過された血が・・・・・

「キリングミーソフトリー。キリングミーソフトリー。優しく殺して～」

「うろさいよっ。」

耳つきの人に言われた。

「何故知らない人といないといけない。」

「しらないよっ。こっちだって迷惑なんだよ。」

「だがこんな物壊せる！」

バギッという心地よい音とともに手枷が砕ける。
おお。目を丸くしてこっちを見ているよ。

「来い！」

そう叫ぶと手に魔王の武具が出てくる。

「よっと。」

普通に空間を切り裂き出て行く。
馬鹿だねえ。化け物を止めたいなら心臓取り出して生き返らないようにしないと
それか頭を狙うだろう。

「ではそこのお二人さん。また会うときまで。」

そう言い出て行く。こんなところにいたら九尾分が足りなくなる。
早くモフモフしに行かなくては。

迷子になる。あれ？また？

「でもめげない！・・・・・むむ。こっちから九尾の気配が。」

だんだん変態と化している気がする。でも可愛い物をかわいいと言って何が悪い！

「九尾発見。全速でモフりに行く。」
そう言い九尾の元へ。
「あう。」
そういいくすぐったそうに体を動かす。
「あ～～癒される。流石九尾。心のオアシス」
「くすぐったいよ。やめてよ～」
「だがやめない。なぜなら九尾が可愛いから。」
そう言うと顔をうつむかせて紅くなる。可愛いな～
「主は人の娘に何をしておる。」
「抱きついて撫で繰り回しています。」
何故か取り上げられた。
「ほらさっさと外に行け。」
「あれ？明日とかにつくんじゃ・・・・」
「世界の管理者、最高神、最高神の息子で最高神候補がいるのよ？」
「はいはい。自慢自慢。」

「あなただってこれぐらいできるでしょう。」
「出来る事とやらない事は違うんですよ。多分。」
「いいから早く外に行きなさい。」
「はいはい。九尾行くぞ～」
そう言い狐の姿にさせてから肩に乗せる。
イステールさんが出した魔法陣に乗る
「あれ？魔方陣できたんですね。」
「この世界ではこう出さないとばれるからね。」
「俺はこんな物出さないんだが・・・・・」
「大丈夫でしょう。じゃあいくわよ～。」
そういわれ転送される。

目の前には大きい海、そして港。橋のような場所でクロノ、アリシアの姉、耳つきコスプレイヤー、遠くにプレシアさん、アリシアがいる。

「なぁ。これって落ちてるよな。」
「そうだね。」
「このまま行くと運に左右されるけど海に落ちるよね。」
「そうだよね。落ちるよね。でも護ってくれるよね！」
「当たり前だ。娘を護らない親が何処にいるんだ？」
「結構いると思うよ？」
「奇麗事だ。きにするな」
だが落下していく。
ちらっと橋の方を見る。何やってるんだ。と言う顔でみんな見ている。
「めんどうだな。」
空中を歩きつつ呟く。
何故歩けるか？だってみんな空飛んで戦ってたじゃん？
「ほい。到着。」
「何でここにいるんだ？君は。」
「何でかなぁ。」
「お兄ちゃん。生きてたんだね。」

アリシアがこちらに来る。だが・・・・・

「近寄らないで！私のお父さんに。」

九尾が叫ぶ。

プレシアさん苦笑、アリシア姉顔真っ赤、耳つきコスプレイヤー笑いをこらえる、クロノ驚いた顔、何故か高町さん驚愕、アリシアは怒った様な顔で睨んでくる。

「君は結婚してたのか・・・」

「クロノ。あとで次元の彼方に飛ばすか、虚数空間な。」

「何故だ！」

「話をややこしくするからだ。」

話をややこしくするなよ。マジで。そして九尾、アリシアと張り合うのはやめろ

「ふ～ん、あなたお兄ちゃんの娘なんだよね？じゃ、結婚できないよね。」

「そんな事無い！お父さんは義父さんと読む。だから問題ない。」

問題大有りだよ。俺は一生独身で貴族になる！

寂しい？寂しさなんて一時の物さ。

「あんまり時間はないから。僕たちは向こうに行くから。」

おお、空気読めたのか。クロノよ。

「ほら、九尾向こうのベンチに行こうか。」

「うん！」

笑顔が可愛い。だから許す。

「フッ。」

勝ち誇った顔をするな。九尾よ。

「アリシアも行こうか。」

そう言い、アリシアの手も握る。

九尾さん、握る力が強すぎて骨が折れます。アリシアさん、握る力が強すぎて内出血が・・・

気がつくともう向こうのお二人はお話が済んだようだ。

目の前でテスタロッサ一家、クロノが転送される。

俺は最後も空気だった。

第三十二話　出会いがあるから別れがある。でも・・・（後書き）

口調が分からん。
最初のセリフが分かる人はいるのだろうか

第三十三話　終わりの始まり（前書き）

一期終了のお知らせ。
短かった一期だがＡｓは長くしたい

第三十三話　終わりの始まり

あらすじ
主人公は『空気になる』を覚えたぞ

～？？？ｓｉｄｅ～

「なるほど。では我々のシナリオと違うがうまくいったということだな。」

『ええ。ですがアイツはどうしましょうか』

「ほうっておけ。どうせ介入する気は無いんだ。引き続き頼むぞ。ラルフ」

『分かりました。世界の管理者さん』

「ああ。」

そういい、報告をきる。
どうやら、うまくいっているようで何よりだ。
だがアイツは後々邪魔になるだろう。

「だが、奴には弱点がたくさんある。そこをうまくつければ・・・・・」

俺は管理者のイスに座り、世界を視る。

「他の世界の力を持つ俺に勝てるか？化け物よ・・・・・」

そういいワインを飲む。

「マズッ。管理者なのにこんな安いモンでいいのか。」

「まぁいい。全て、私の手の中なのだからな。この『物語の操主』の・・・な」

そういい男は不敵に微笑む。しかし微笑みはしだいに笑みとなり大きな声が響いた

「アハハハハハーハッハッハ」

～？？？side　out～

第三十三話　終わりの始まり（後書き）

はい。くだらない物です。
そして書き切れない複線という名の伏線

第三十四話　ジョブチェンジ（前書き）

ジョブチェンジ・・・職業を変えること。またこの物語では肩書きを変えること。

原作？何それ。

またこの物語は基本原作に絡みません。おいしいところだけもっていくのさ！

ハイエナのように・・・

第三十四話　ジョブチェンジ

あらすじ
なぜか伏線。されども伏線。

ある晴れた日に俺は死にました。
「何故また死んだし。」
「仕方ない。こればかりは仕方ない。」
「親父も今回は悪くない。」
「九尾も死んだことが俺は許せないんだよ。」
「私も死んだ～。これでお父さんと一緒。」
何故こうなったか。説明しよう・・・

「九尾おいそこに行くな。」
「え～」
「おい、危ない！」

キキー、ドンッ

人生終了のお知らせ

てことがあった。

「お主死なないんじゃないのか。」

「オリエア。それが一番知りたい。」

「だったら、お前は化け物じゃなくて一般人になったんじゃないのか。」

「オリ。そんなこといわないで！俺の個性が無くなる。」

俺が化け物と言う肩書きのような物を取ったら人でも無くなる。

「そしたら、俺って何になるんだ？」

「「人の形をした何か」」

オイ、何かってなんだよ。

「わたしといっしょだ～。うへへへ。」

「てか、イステールさん酒くさッ」

「イステールは・・な・・・・」

「わたしは～～もうかんりしゃじゃないの～ただのくつね～」

「くつねって何？」

「ろれつが回ってないんじゃよ。」

「ほらイステールさん。向こう行きますよ。」

「おりく～ん」

そういい向こうの部屋へ飛んでいった。

「どうしたんだよ。」

「わしたちと一緒にいたときにイスを取られたらしい。まぁおもちゃ箱は無事じゃな。」

「アルハザードか。というより誰に盗られたんだよ。」

「転生者じゃよ。自分で言っておったわ。」

「はあ。そうか。よし潰してくる。」

「気持ちをこらえて落ち着け。お前は死んでいる。じゃから行っても無駄じゃよ。」

「そうだよな。だが断ｒ「じゃからおぬしには魔王になってもらおう。」ｗｈｙ？」

「じゃからおぬしの武具。魔王の名にふさわしい者になればいい。」

「だって、高町が魔王様、大魔王様、冥王様、悪魔、管理局の白い悪魔、管理局の白い冥王だろ？」

「じゃがお主は王になれるわけ無いだろう。じゃから闇統べる王のようになればよい。」

「いつかお前はファンに殺されるであろう。」

「うるさい。魔を統べるだとかになればいい。」

「どこの魔物使いだよ。」

たしか、魔を統べる者ってなかったか？だから断る。

「だったらいまからおぬしは“魔王見習い”じゃ！」

なぜだ。

第三十四話　ジョブチェンジ（後書き）

化け物からの昇格なのかな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7367z/

魔法少女リリカルなのはって何？

2012年1月11日06時53分発行